

# なぜ哲学は神学になったのか

## —人間の認識能力の限界と恵みの神の要請—

古牧徳生\*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】古代ギリシアに発祥した哲学は「真に在るところのものは何か」を探求していくうちに、人間の認識能力の限界に行き当たり、懐疑論に陥った。この懐疑論を克服するために多くの哲学者たちは次第に神の恩寵を約束するキリスト教に改宗していったことを思想史の流れから見てみたい。

キーワード：懐疑主義、新プラトン主義、ヘブライズム

### 序論

哲学は、人間が移ろいゆく自然の奥底に何かしら永遠不変なものがあることに気づいた時に始まった。現代に生きる我々なら、それについて素粒子とか自然法則を挙げるだろうが、古代ギリシア人はそれをピュシス *Physis* と呼んだ。

—— 生成消滅する自然の背後にあるピュシスとは何だろうか。

こうして彼らは自然の観察に全神経を傾け始めた。いわゆるイオニアの自然哲学である。彼らの或る者は水、別の者は空気を挙げ、これらが様々な状態に変化することにより自然現象は起きるのだと説いた。

これに対し南イタリアはエレアの Parmenides (前 515 頃-450 頃) は「ピュシスの探求には感覚による観察ではなく、ただ理性だけを用いるべきだ」と主張した。というのは感覚に頼る限り、我々は生成消滅という現象の表層をなぞるだけだからである。そこで彼は自らのピュシス探求の出発点としてただ一つの命題を据えた。それは余りにも自明なため誰一人異議を唱える者はなかった。

在るものは在る。無いものは無い。

つまり存在と無の峻別である。いま、この当たり前の論理を展開していくとどうなるか。

—— 「オタマジャクシがカエルになる」と言われるが、オタマジャクシがいる時点ではカエルはまだ存在していない。つまり無である。しかし無いものには成りようがない。なにしろ無いのだから。

かくしてオタマジャクシからカエルが生成することはあり得ないことになる。同じ現象を逆から見ればどうなるか。

—— 「オタマジャクシがカエルになった」と言われる。今や目の前にいるのはカエルであり、オタマジャクシは消滅つまり無に成ったわけである。しかし存在しないものにどうして成れるのだろうか。無いものには成りようがないではないか。

すると世界には生成も消滅もあり得ないことになる。となれば在るのは永遠不変のただ一つの存在だけと考えるしかない。だがこれでは余りにも現実とかけ離れ過ぎている。そこで続く人々は Parmenides が主張する「永遠不変の存在」と「生成消滅の世界」の調停に取り組んだ。その結果として前五世紀末から四世紀初めの頃には二つの全く対照的な回答が出されるに至った。

(その一) 一つはイオニア以来の自然哲学の総決算とも言える原子論である。この立場を代表するのは Leucippus とその弟子のアブデラの Democritus (前 460 頃-370 頃) である。彼らによれば存在しているのは無数の永遠不変の原子であり、それら原子が離合集散することで生成消滅が起きるとされた。この立場でいくとピュシスとは原子であって、この世界の中に存在していることになる。

(その二) もう一つは「異次元からの声が聞こる」という特異体質者アテナイのソクラテス (前 470 頃-399) の意見である。彼は自然の世界に合目的秩序

2014 年 12 月 3 日受付：2015 年 1 月 27 日受理

\* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西 4 条北 8 丁目 1

E-mail : hurumakius@nayoro.ac.jp

が見られる事実を指摘し、そうした秩序を世界に与えたものとして、世界を超越した神々の存在を示唆した。こちらの立場でいくとピュシスはこの世界を超えて存在していることになる。

この超自然的立場を展開したのが弟子のプラトン(前 427-347)だった。彼はソクラテスが示唆ただけで終わった超自然的ピュシスにアイデア **idea** という名前を与え、それを天上においた。

—— この世界のすべての事物は天上のアイデアを分有することで存在している。我々が目にする馬や鹿はそれぞれ、天上にある馬のアイデアや鹿のアイデアを分有することにより、馬であり鹿であるのだ。

—— この世界にある事物はどれも生成消滅する儚い存在であるから、それを確実に認識することなど不可能だ。なぜなら存在しても陽炎のように消えてしまうのだから、そんなものの認識はどうしてもあやふやなものに留まる。ゆえにこの世界の事物については揺るぎない真の知識などあり得ない。

—— しかしアイデアは永遠不変の存在である。ゆえにアイデアについての認識は揺るぎない確実な知識であり、それこそ永遠不変の真の知識である。

プラトンに言わせれば、我々が足の長い四足の哺乳動物を見て「これは馬である」とか「あれは鹿である」と認識するとき、我々は天上にある「馬のアイデア」とか「鹿のアイデア」を想起しているのである。だがそうだとすると誰でも次のような疑問を持つことだろう。

—— 地上の世界にいる人間がどうして天上のアイデアを知ることができるのだろうか？いくら数学で頭を鍛えたとしても人間の理性で永遠不変な存在を捉えることができるだろうか？

プラトンの弟子のアリストテレス(前 384-322)はアイデアを否定した。彼によれば馬を馬として、鹿を鹿として認識するとき、我々が認識しているのはあくまでも目の前の動物の中に潜んでいる形相(エイドス)であって、この世を超えたアイデアではない。その形相とは或る事物をその事物たらしめている本質であって、世界の諸事物は自らの形相を実現すべく汲々としているとされる。すると、ちょうど粘土が壺の形相を獲得することで初めて壺となるように、事物はそれぞれ何らかの形相を自らに実現すること

でようやく完成されるわけである。こうした力動的な世界観で考えていくと、生成消滅も形相の実現という観点から理解されることになる。

—— オタマジヤクシはカエルの形相を実現しつつある。それが完全にカエルの形相を実現したとき、カエルが生成する。またその途上でオタマジヤクシの形相が徐々に失われていくことがオタマジヤクシの消滅ということなのだ。

一度このような見方が採用されると、生成消滅だけでなく質的变化や場所的運動も、とにかくすべての変化が力動的に理解されることになった。

—— 地上の事物は土、水、空気、火の四つの元素でできている。これらのあるものは上へ、あるものは下へそれぞれ直線運動する。このように反対の性質のものどもの合成体であるから、どれもいずれは分解し消滅してしまう。

—— これに対し天体たちは四元素とは別の単一の元素(アイテール)でできているから分解しない。だから永遠である。永遠である以上、永遠の運動である円運動をする。

だがここで疑問が生じる。

—— 永遠なものがどうして運動するのだろうか？永遠なら不動の方がふさわしいのではないか？

かくしてアリストテレスは、事物のアイデアについては否定したが、天体たちの運動の原因として、天上界を超えた彼方に第一原因を措定した。それは理論上、純粋な形相であるから始めから完成されており、いかなる変化もあり得ない。永遠不変である以上、最高の存在であり、従って神とされる。そして、こうした最高の存在を認識することこそ人間の最高の幸福であるとした。だがそうになると、我々はプラトンのアイデアと同じ困難に陥ることになる。

—— 知るとは事物の形相を認識することである。さて神は純粋形相であるから永遠にして不変、ということは最も確実な存在ということになる。最も確実に存在しているとなれば、それは最もよく認識され得るだろう。まただからこそ、そうした知識は最も確実な知識つまり真理である。

—— しかるに実際はどうか。いったい誰が天上界の彼方にあるものを認識できるのだろうか。そのように誰にも認識できない存在が絶対確実な知識の対象とはおかしくないか。

当然ここから「確実な知識は人間には獲得不可能ではないのか」という疑念が生じることになる。すなわち**懐疑主義** skepticism である。

## 一章 懐疑主義

### 一節 ピュロン

懐疑主義の開祖はエリスのピュロン(前 365-275 頃)である。ディオゲネス・ラエルチオスが伝えるところでは彼は売れない画家だった。<sup>1)</sup>そのうちに哲学を学び始め、初めはメガラ派に属するブリュソンに師事した。

メガラ派はソクラテスの弟子の一人だったエウクレイデス(前 450 頃-380 頃)に始まる。彼はパルメニデスの哲学を学ぶ一方でソクラテスに傾倒し、故郷のメガラがアテナイと険悪になった時でも夜陰に乗じソクラテスの許を訪れたらしい。このエウクレイデスは「ソクラテス是对話を通して事物の本質を規定することにより、真にあるところのもの、つまりピュシスを究めようとしていた」と理解した。

—— 善であれ美であれ、ソクラテスはあれこれの善なるものや美なるものを列挙するのではなく、それらを善くあらしめている「善さ」や美しくあらしめている「美しさ」を問うていた。

—— それでいくと「善さ」とか「美しさ」といった概念と概念のあいだにも、共通する何かがあるとえよう。実際「善さ」も「美しさ」も「在る」という点で共通している。

—— するとその昔パルメニデスが言っていたように、究極的にはただ一つの存在に行き着くことになる。それをソクラテスは「善」と説いていたのではないだろうか。

だが「世界には色々あるように見えるけれども、本当はただ一つ、善が存在しているだけである」という主張は、「世界には色々なものが存在しているように見えるけれども、本当はただ一つ、不変の球体が存在しているだけである」というパルメニデスの主張に優るとも劣らず常識では理解しがたい。そこで彼は徹底的に精緻な議論をすることで自説の正しさを証明しようと躍起になった。そのため世間はいつしか彼とその弟子たちを「ディアレクティコイ論争家たち」と呼ぶ

ようになった。つまり議論のための議論をする人々というわけである。

次にピュロンはアナクサルコスに師事した。この人はデモクリトスの弟子だったらしいから、ピュロンは恐らく原子論を学んだと思われる。その原子論を集大成したデモクリトスは感覚の不確実さを力説していた。

—— 本当に存在しているのは原子であるが、我々の感覚は大雑把なものであるから、原子を認識できない。だから砂糖を舐めれば「甘い」と感じるが、砂糖を構成している原子レベルでは本当に甘いかどうかまでは分からない。感覚が教えてくれるのはあくまで現象についてであり、それも人によって千差万別だから、しょせんは憶測でしかない。<sup>2)</sup>

まことにデモクリトスによれば、感覚による認識とは「暗い知識」であり、思考を通じた認識こそ信用に足る「真正の知識」だった。<sup>3)</sup>そして、このような理性主義者のデモクリトスをピュロンは一番尊敬していたらしい。<sup>4)</sup>

そのうちにアレクサンダー大王の東征が始まるとアナクサルコスも随行したため、自然にピュロンも師について西アジア各地を巡り、ペルシアの賢者やインドの裸行者と接触したようである。長い旅を通じて諸民族の様々な風俗習慣を知ったことで彼は世に真理とされることの、とりわけ道德の、相対性を痛感したことであろう。故郷に戻ってからは自らの哲学を説いたが、著作は残さなかったようである。

こうしたピュロンについてラエルチオスは次のように伝えている。

「……彼は……物事の真理は把握できないということと判断の留保という形の議論を哲学のなかに導入して、まことに気位の高いやり方で哲学活動を行ったように思われる。というのも彼は、何一つ美しくもなければ醜くもないし、また正しくもなければ不正でもない、と主張していたからである。また同様に、あらゆる事柄について、真実にそうであるものは一つもないのであって、人々はただ、法と習慣に従ってあらゆることを行っているにすぎないと彼は主張していたが、その理由は、それぞれの事柄はあれであるよりもむしろこれであるということはないからだ、ということにあった」<sup>5)</sup>

つまりピュロンはこう言いたかったのだろう。

—— 我々の感覚が認識しているのはあくまで現象であり、現象は感覚する人ごとに違うから相対的なものである。相対的である以上、現象についての認識は蓋然的なものに留まる。我々は世間がそう言うから「砂糖は甘い」、「塩はしょっぱい」と言っているにすぎない。でも本当はどうなのか分からないのだから、「砂糖は甘い」とか「塩はしょっぱい」とか断言しない方がよいだろう。

理屈はその通りだと思う。確かに我々は初歩的な感覚の判断でもしばしば間違える。

筆者の例だが、昨年六月、天塩川の土手を散歩していたら、すぐ下の河川敷を一匹の犬がこちらに近づいてくるのに気づいた。一瞬、野犬ではと緊張したが、よく見たらキツネでほっとすると同時に驚きもした。

もっともこれは感覚の不確かさというよりも単に筆者の目が悪いだけの話かもしれない。誰もが領く認識の不確かさの例は夢だろう。夢を見ているとき、我々はまったくの非現実を現実と思い込んでいる。そのまことに象徴的な例を挙げよう。

—— 数年前の六月、中学の同窓会が静岡市駿河区のツインメッセで開かれた。その席で「哲学の授業でどういうことを教えているんだ」ときかれた。そこで「よく取り上げるのは認識の不確かさについてだ。今こうやって話しているけど、これが夢じゃないという保証は果たしてあるのか」と言った。

次の瞬間、筆者は自分が下宿の寝台に横たわっていることに気づいた。まさに筆者は「現実を夢かもしれない」と夢の中で語っていたわけである。すると今こうして懐疑と憶測をめぐる物語を書いていることもまた疑わしくなってくる。今この瞬間も実は夢ではないだろうか、と。

幾度か見えて跡なく覚むる世を

夢と思うもなお夢のうち

今川氏真(1538-1614)

すると以上から言えることは、「判断の正しさ」を客観的に保証するものは我々にはないし、そもそも「正しい判断」があるのかどうかも不明ということだろう。仕事に励み趣味を楽しんでも実は夢かもしれないとすると、それこそ夢のない話である。

どうすればいいのだろうか。ピュロンの回答は**判断留保 epochē** だった。

—— 感覚にせよ憶測にせよ、それらは真でもなければ偽でもない。だから信じるべきではないし、何事につけても意見を持つべきではないし、特定意見に与するべきではない。そうした態度でいれば、まず沈黙 *aphasiā* が、それからアタラクシアつまり精神の平和が訪れるであろう。<sup>6)</sup>

つまり独断的なことは言わず、判断を留保していれば、少なくとも自分が間違える恐れはなくなる。するとその意味で、つまり恐れとか不安がないという意味で、心が平穏になるというわけである。

だが、いくら平穏とはいえ、こんな消極的な態度で厳しい現実を生きていけるのかと筆者は疑問に思うが、ピュロンは自らの主張に合致した生活を実践していたそうである。ラエルチオスによれば、通りを歩いているときも、向こうから馬車が来ようが犬がこようが、彼は用心もしなければ避けもせず平然としていたと言われている。<sup>7)</sup>

また師のアナクサルコスと歩いていたとき、アナクサルコスが沼に落ちた。しかしピュロンは何もせずに行ってしまった。人々は当然ピュロンを非難したが、アナクサルコスは不測の事態にも乱されないピュロンの心の平静さを逆に褒めたと伝えられている。<sup>8)</sup> こうなると、もはや禅問答であるが、その一方で彼には犬に追いかけて逃げ回ったという逸話も残されているから、完全に達観できていたわけではなさそうである。

## 二節 中期アカデメイア派

ピュロンが唱えた懐疑説は弟子のティモンでいったん途絶えてしまった。だが思わぬところでピュロンの思想を継承する人々が現われた。プラトンが開いたアカデメイアである。

プラトンは中年においては真に存在するものとしてアイデアを力説していたが、晩年になるにつれ、その主張には懐疑の翳りが現われるようになった。アイデアの超越性を説けば説くほど、そのような彼岸の存在を此岸にある人間が理解することは論理的に不可能なはずだからである。

師が次第に悲観的になっていったから、弟子たちも懐疑的傾向を強めていった。それが顕著となったのは第六代学頭のアルケシラオス(前 315-241 頃)からである。キケロが伝えるところでは、彼は「人間

は感覚によっても精神によっても確実なことは何一つ分からない」という結論に達したらしい。<sup>9)</sup>

これが原子論者のデモクリトスなら感覚は否定しても理性については信頼していたが、アルケシラオスは感覚のみならず理性についても不信の念を表明した。彼の懐疑は極めて徹底したもので、ソクラテスの「無知の知」すらも否定した。

「そこでアルケシラオスは、そもそも何か知られ得るような事柄が存在するというのを認めず、ソクラテスが唯一、自分に残しておいたことさえ認めなかった。こうして、すべては隠れていると考え、識別可能、認識可能なものは何ひとつ存在せず、したがって何ごとも断言したり肯定したりすべきではなく、また同意しつつ認めてもならない、いつも同意を控え軽率に陥らないよう慎むべきであると考えた」<sup>10)</sup>

既に見たようにソクラテスは「この世界を超えた彼方に永遠不変な何かが存在する」と会う人ごとに語っていた。それを彼は神霊と表現したため「神を冒瀆した」という罪状で死刑になったわけだが、とにかく「認識できない何か」の存在を認めていたわけである。

しかしアルケシラオスに言わせれば「認識できない何かが存在する」とどうして断言できるのだろうか。それが何であるかは分からなくても「何かが存在する」と言った時点で既に「何か」を認識しているわけである。となれば「認識できない何かが存在するか分からないし、存在しないかも分からない」と言う方が真にロゴス(理屈)に則った態度であろう。ソクラテスのような「自分が知らないということを自分は知っている」ではなく「自分が知らないということさえ自分は知らない」というわけである。かくして彼はあらゆる事柄について判断を控えたため、著作を全く残さなかった。<sup>11)</sup>

感覚のみならず理性にも不信の目を向けたアルケシラオスの懐疑の姿勢は続く者たちに引き継がれ、八代目学頭のカルネアデス(前 219 頃-129 頃)においては「或る一つの命題とそれを否定する命題が同時に成立することはない」という矛盾律までもが疑われるに至った。これについて、よく挙げられる例はクレタのエピメニデスの逆説である。

—— クレタ島出身のエピメニデスは「すべてのクレタ島人は嘘つきだ」と言った。この発言は真か偽か？

—— エピメニデスはクレタ島の人である。従って彼は嘘つきである。だから彼のこの発言は偽であり、本当はクレタ島の人は嘘つきではない。

—— でもエピメニデスが嘘をついているということは、いかにもクレタ島の人間らしく振舞っているわけだから、彼は本当のことを言っていることになる。つまりクレタ島の人は本当に嘘つきである。

このように「すべてのクレタ島人は嘘つきである」とクレタ島人が言った」という命題は真とも偽とも同じ程度に理解できる。同一の命題が真偽いずれとも理解可能となると、論理学の最大の根本原理である同一律自体がぐらついてくる。これでは哲学はできない。なぜなら哲学とはパルメニデス以来、論理の積み重ねでピュシスを究めようとする知の営みだからである。そのため、やがてアカデメイア派は元の独断的立場に戻らざるを得なくなった。第十一代学頭のアンティオコス(前 130 頃-68 頃)の時である。

### 三節 セクストス・エンペイリコス

これに不満だったのか、前 43 年頃、クノッソスのアイネシデモスはアカデメイアを離脱し、自ら懐疑主義を復活させた。哲学史では彼以降の懐疑派を新懐疑派と呼ぶ。この立場の代表は二世紀後半から三世紀初頭にかけてアレクサンドリアで医師をしていたセクストス・エンペイリコスである。エンペイリコスとは「経験」を意味する *empeiria* に由来する。恐らく医師という臨床を重んじる職業上、プラトンやアリストテレスのような独断に陥ることを避け、現象だけに関心を限定する経験主義 *empiricism* に共感したのであろう。経歴は一切不明だが、古代の諸哲学に通暁していたことからアテナイやローマで学んだ可能性がある。

彼によると哲学には三種類ある。

「人々が何か事物を探求する場合に、結果としてありそうな事態は、探求しているものを発見するか、あるいは発見を否認して把握不可能であることに同意するか、あるいは探求を継続するかのいずれかである。…… このうち真実を発見したと考えるのはアリストテレス派、エピクロス派、ストア派、その他の人々のように、固有の意味でドグマティストと呼ばれる人たちであり、また把握不可能であると自らの見解を表明

したのはクレイトマコスやカルネアデスの一派、およびその他のアカデメイア派であり、そして探求を続けるのは懐疑派である」<sup>12)</sup>

すなわち(1)真理を既に発見したと主張する独断的哲学、(2)真理は把握不可能として探求を断念するアカデメイア派、(3)真理の探究を継続中の懐疑派である。一見すると(2)も(3)も同じ懐疑主義のように思えるが、「真理は把握できない」と断言したら、把握不可能ということ把握していることになり、既に見たソクラテスの「無知の知」と同じことになる。だから真に懐疑に徹するなら、「把握できない」という否定的独断も避けるべきなのである。エンペイリコスと言う。

「存在する事物のそれぞれが、それ自身の自然本来のあり方において、純粹にどのようなものであるかということを我々は言うことができず、ただ相対的關係においてどのようなものとして現れるかということと言うことができるだけであろう。そしてこのことから帰結するのは、我々は諸々の物事の自然本来のあり方に関して判断を保留しなければならないということである」<sup>13)</sup>

つまり人間が認識するのは現象だけであるが、その現象にしても現われ方は人それぞれであるから、どの現われが正しいのか分からない。だから判断を控えた方がよいというわけである。

この主張のうち判断留保はともかく現象の相対性については筆者も頷くところがある。筆者には兄が二人いる。上の兄に言わせれば、下の兄は色盲らしい。なんでも小学生の頃、家の裏の堤防に腰をおろして近所の銀行を写生したとき、銀行の白い壁を下の兄は紫色に描いたそうだ。驚きのあまり筆者は叫んでしまった。

—— えっ、どう見てもあの壁は白じゃないか。

—— そうだ、白だ。あいつは目がおかしいんだ。

同じ銀行の壁を見て、上の兄と筆者は「白」、下の兄は「紫」。すると二対一で「白」が正しい——となるのだろうか。ひょっとしたら少数派の方が正しいのかもしれない。我々は自分がたまたま多数派に属しているから自分の判断は正しいと思い込んでいるだけなのかもしれない。こんなことを言うのは、たいていの日本人なら次の小咄を聞いたことがあると思うからである。

—— ある行商人が山奥の村に行きました。最初に出くわしたのは何と一つ目小僧でした。行商人は驚いて「わっ、一つ目だ!」と叫びまし

た。相手も同時に「わっ、目が二つある化け物だ!」と叫びました。すると「えっ、化け物だって」と家々から大勢の一つ目小僧たちが飛び出してきました。こうしてこの行商人は化け物として見世物の檻に入れられてしまいましたとさ。

確かに一つ目小僧たちから見たら、我々の方が化け物だろう。こう考えてくると、この世には「正しい意見」と「間違った意見」があるのではなく「多数派の憶測」と「少数派の憶測」があるだけで、多数派が数の力で「真理」を名乗っているだけではないだろうか。そんな気がしてくる。

しかし、いくら多数派だからと言って、それで憶測が真理になるわけではない。実は多数派の方が間違っている可能性はあろう。実際、近世に至るまで宇宙についての多数意見とは「太陽が地球の周りを回っている」というものだった。「地球が太陽の周りを回っている」と主張したジョルダノ・ブルーノ(1548-1600)は見世物どころか火刑に処されてしまった。この歴史的事実から、「多くの人が言うから正しい」とは限らないことがわかる。となると何事であれ断定的なことは言わず、「私にはあの銀行の壁は白いように思われる」、「私には一つ目の方が化け物であるように思われる」、「私には地球が太陽の周りを回っているように思われる」と蓋然的な言い回しをしておいた方が無難であろう。

「……自然本来的に美しいこと、あるいは悪いことについて不確定の態度をとる人は、何ごとをも熱心に回避することもなければ、追求することもない。そしてまさにそれゆえに、無動揺を得ているのである」<sup>14)</sup>

無動揺つまり精神の平和とエンペイリコスは言いたいのだろう。だが、そうした精神状態ははたして幸福だろうか。

先ほど我々はエンペイリコスが哲学を三つに分類し、懐疑主義について「探求を続ける」としていることを見た。だが、ここには、虚偽に陥るのを恐れるあまり本当は真剣には探求していない姿が現われている。なるほど断定的なことは言わず「私には～と思われる」と蓋然的知識に甘んじていれば確かに間違える不安はないから、その意味で心の動揺はなく従って幸福のつもりかもしれないが、そうだとしたら、ずいぶんと侘しい幸福である。全身全霊を傾けて探求しようとしめない態度が人間にとって本当に幸福だろうか。思い出してほしい。アリストテレス

が『形而上学』の冒頭で述べていたことを。

すべての人間は生まれつき知ることを欲する。<sup>15)</sup>

我々は知識を、それもより確実で、より根源的な知識を求めてやまない以上、判断留保という退嬰的態度では生来の知的欲望は絶対に満たされないままである。なるほど「真に存在する何かがあるのかどうか不明だし、仮にあるとしても人間の能力で認識可能かどうかとも分からない」という主張は理屈ではその通りだが、それで心にもたらされるのは懐疑派が言うような平穩ではなく、むしろ不満ではないだろうか。現象の奥底にあるピュシスを知ろうとして哲学が始まったことを考えれば、判断留保は哲学の挫折であり、そこに心の平穩を見出すことは哲学の終焉である。

そこで判断留保で終わらずに探求を続けようとする人々はピュシスの存在を始めから前提にするようになっていった。つまりアリストテレスの「不動の動者」のような超自然的存在の承認である。それは超自然である以上、人間の通常的能力ではもちろん認識できない。そこで主張されるようになったのが通常ではない認識すなわち神秘的直観である。

## 二章 新プラトン主義

### 一節 一者と流出

この立場を唱える新プラトン主義の創始者はアレクサンドリアのアンモニオス・サッカス(175 頃-243 頃)とされている。経歴は全く不明であるが、孫弟子にあたるポルピュリオス(234-305)が伝えるところでは、彼はもともとキリスト教徒の家庭に育ったが、長じて哲学に触れると棄教したらしい。通称の「サッカス」についてギリシア語で粗布の袋を指す「サッコス」との関連が指摘されることから、どうやらキュニコス派のように学究一路の檻褻の人だったと思われる。著作を残さなかったため、彼が具体的に何を説いたのかは分からないが、彼の死後、三人の弟子のあいだで師の教えを秘密にする約束が交わされたというから、<sup>16)</sup>恐らく秘教色の強いものだったであろう。

このアンモニオスに学び、もともと神秘的傾向のあったプラトン哲学をはっきりと神秘思想として体系化したのが、いま触れた三人の弟子の一人プロチノス(204-270)である。彼はエジプト出身と伝えられ

ているが真偽のほどは不明である。ギリシア語の綴りや発音を間違えることもあったらしいから、ギリシア人ではなかっただろう。

プロチノスは28歳のときにアンモニオスに出会い、以来11年にわたり彼の教えを受けた。そして40歳の頃からローマで教え始めたが、深い学識に加え親切で温和な性格だったため多くの人から慕われ、時のガリリエヌス帝夫妻からも敬愛された。

死後、弟子のポルピュリオスが遺稿を整理し、一卷につき九篇、全六巻五十四篇から成る論文集『エンネアデス』を編んだ。そのポルピュリオスによると、プロチノスは「ピタゴラス哲学とプラトン哲学の原理を彼以前の人々よりもいっそう明確に解釈」<sup>17)</sup>した人で、彼の哲学の目的とは「すべてのものの上にある神に近づき、合一すること」<sup>18)</sup>だったという。そこでまずは彼の世界観から見ていこう。

プロチノスによれば、世界の根源として唯一の完全な存在がある。それを彼は一者 *to hen* と呼ぶ。一者は全ての存在するものを超えた彼方にあるから、我々が目にするような物的な存在ではない。

「……この一者は、これを源とする諸実在のいかなるものでもなく、かといって、これについて述べる言葉もないような素晴らしいものなのであるが、強いて言うなら、存在 *on* でも実体 *ousia* でも生命 *zōē* でもなく、これらすべてを越えたものなのである」<sup>19)</sup>

一者はまた「善」*agaton* と呼ばれる。

「……この源としての善は、活動によって善であるのでもなければ直知 *noēsis* の働きによって善であるのでもなく、ただただ自分自身に留まっていること、そのことゆえに善なのである。なぜなら、それは、実体 *ousia* を超えた彼方にあるものであるがゆえに活動を超え、知性 *nous* や直知の働きを超えて、その彼方にあるからである」<sup>20)</sup>

一者は「万有を生み出す力」<sup>21)</sup>であるが、あらゆるものを超えているから、自らの外へと働きかけるようなことはない。<sup>22)</sup>それにもかかわらず多なる世界が生じたのはなぜだろうか。プロチノスは言う。

「……およそ既に成熟完全の域にあるものは、すべて生むのであってみれば、常住完全の状態にあるものは常住永遠に生むはずである」<sup>23)</sup>

つまり一者は完全であるから無限に豊かであり、従って自ずと横溢すると言いたいわけである。これ

の喩えとして彼は、太陽から不断に光が発せられていることを挙げる。

「その類例となるものは日光であって、太陽の周囲には、これを馳せめぐる輝かしい光が見られるのであるが、しかしその場合、太陽は静止したままで、しかもそこから不断にその光が生まれ出ているのである。のみならず、存在するものは総じて、それが存在する限りにおいて、そのあるがままの存在から、その周囲に、そのの外に向かって、それに依存するところの存在を、それが現にもっている能力から、必然に成立させるものなのであるが、そこに成立せしめられる存在は、それを出生させたものをいわば原型とする、一つの影像なのである」<sup>24)</sup>

有名な**流出説**である。かくして一者から最初に流出したものが**知性 nous** である。

「かのものからは、ただかのものの後続くもので、しかも最大者のみが生ずると言わなければならない。ところで、かのものの後続く最大者はすなわち知性なのであって、これが第二位の存在なのである」<sup>25)</sup>

プロチノスによれば、太陽から発せられた光には太陽との同類性があるように、一者から生み出された知性には一者との同類性がある。<sup>26)</sup>すなわち一者が万物を生む力であるように、知性もまた存在を生み出す力なのである。<sup>27)</sup>ゆえに知性は、自らが生じたその時点で、すべてを生み出すことになる。

「まことに我々の言う知性はかくの如き素性のものであってみれば、この上なく純粋なものとしてのこの知性には、第一の始元以外のところからは決して生じ得ないというのが当然のことではなければならない。またひとたび生ずる時は、既に自分自身とともに存在のすべてを生むのでなければならない。すなわちそれは美しいイデア界の全体と知性的な神々の全部を生むのである」<sup>28)</sup>

知性が生み出したものたちは知性の内に留まり、一者に次ぐものとして知性界を構成している。<sup>29)</sup>そのうちの 하나가**靈魂 psychē** である。知性には衝動も情念もないが、靈魂には欲望がある。だから自分が知性界において見たものに基づいて、自らも制作し創造しようと欲する。こうした欲望により靈魂は知性界から流出することになる。<sup>30)</sup>ただし靈魂のすべてが知性界から流出するわけではない。知性界に留まる靈魂もある。

「……靈魂の第一の部分すなわち知性界で常に真実在に満たされ、その光を受けて輝いている部分は知性界に留まっているが、別の部分すなわち第一の部分の真実在の直接の分取を通して(間接的に真実在を)分取している部分は、生命から出た生命として間断なく(下の世界へ向かって)進んでいく」<sup>31)</sup>

かくして知性界から流出した靈魂は「まず天界へ進み、そこで物体を受け取り、天界を通過してさらに降下し、その降下の程度に応じて、より土の性の多い物体へと向かう」<sup>32)</sup>ことになる。つまり感性界の中でも、知性界に直に接する恒星たちにまず靈魂が入り込み、その次に惑星たちに、そして最後に宇宙の底辺である地球に靈魂は降り来ることになる。<sup>33)</sup>それが人間と彼を取り巻く地上の様々な事物である。

これら地上に降りた靈魂の中でも、生命や成長の原理だけのものは特に**自然 physis** と呼ばれる。

「……もし人がこの自然に或る種の理解力もしくは感覚力を与えようと望んでも、それは、我々がほかの生き物の場合に感覚もしくは理解と呼んでいるものと同じものではないのであって、むしろ眠っている人の感覚もしくは理解を目覚めている人のそれと比べた場合のようなものだろう。つまり自然は、自己自身の中に他を交えずに留まっているのであって、この場合の観照の対象は自分しかないのだから、自己自身を自己自身の観ものとしてとらえ、これを観照しながら(上に向かうことも下に向かうこともなく)静かに留まっているのである」<sup>34)</sup>

こうした自然が活動するのに必要なのが**質料 hylē** である。それは自然の下に横たわっているものであり、自然の制作の材料となるものである。<sup>35)</sup>だが、あらゆる事物に成りうるためには、質料自体にはいかなる性質もあってはならない。<sup>36)</sup>そこでプロチノスと言う。

「質料は(ほかのものと一緒になっている時には)いろいろな性質を受け入れ、それらの性質が質料を基体として質料に内在しているが、ただ質料のみの時には、それらの性質のいかなるものも持っていない……質料が悪であると言われるのは、性質を持っているからではなくて、むしろ性質を持っていないからである」<sup>37)</sup>

まことに質料は、それ自体としては、いかなる形も持たないがゆえに、そうした質料から出来た物体はどれも脆弱で不安定なのである。このことから悪



とは形相の欠如という消極的意味で理解されることになる。

「一般に悪は(積極的な何かではなくて)善の不足であると考えるべきである。そしてこの世界で善の不足ということがあるのは、善が(それ自体としてあるのではなくて)他者の内にある以上、必然である。つまり善がその内にある他者(素材)が善とは異なるものであるもので、不足を生じせしめるのである」<sup>38)</sup>

以上を整理すると世界は一者、知性、靈魂、自然、質料の五層より成り、このうち一者と知性と靈魂が知性界、自然と質料が感性界ということになる。

## 二節 靈魂の還帰

人間は肉体を持っている以上、感性界の一員である。しかし理性的な靈魂も有するから同時に知性界にも属する。すると人間は二つの世界に両属していることになる。

「……靈魂というものは……知性界の存在の一員であるとともに、感性界全体の存在のなかでは第一位のものでもあるのである。だからこそ靈魂は知性界と感性界の両方にかかわりを持っていてるのであって、一方のものによっては恩恵を与えられ eupathousa, 絶えず新たな生命を与えられるのであるが、他方のものによっては、その類似性のゆえに欺かれ、あたかも魔法にかけられたものの如く下の世界へ向かうのである」<sup>39)</sup>

相反する方向に引かれている以上、人間は靈魂の本性を正しく理解し働かせるように努めねばならない。その人間の靈魂についてプロチノスは三つの部分よりできているとする。<sup>40)</sup>

「……我々の靈魂については次のように考えるべきである。すなわち、その一部分は常にかの世界に留まり、また一部分はこの世界に関係している。そして残りの一部分は前二者の中間に位置する。というのは我々の靈魂は一つの本性(もの)ではあるが複数の能力を有していて、ある時には靈魂全体が自己の最良部分と有るものの最良部分にしたがって動くのだが、ある時には靈魂の劣った部分が下方へ引きずられて、中間をも一緒に引きずるのである」<sup>41)</sup>

つまり(1)知性界に留まっている部分、(2)中間部分、(3)この地上の感性界に留まっている部分、があるわけである。

(1)は知性界にある以上、やはり知性 nous である。

それは肉体を通さずに、質料を持たない対象を認識する。それが直知 noēsis つまり知性認識である。<sup>42)</sup>

しかし現実の人間は肉体を帯びて感性界に生きているから、直知はできない。そこで必要になるのが質料を基にした論理的な思考 logismos であり、それを行うのが(2)の理性的靈魂 logikē psychē あるいは理性 dianoia である。

これに対し、質料あるものについて、肉体を通した認識つまり感覚 aisthēsis を行うのが(3)の感覚的靈魂であろう。

さて、我々がいま住んでいる世界は感性界であり、そこには多くの質料的な事物があふれている。つまり自然である。自然は知性界の写しであるから、やはり美しい。<sup>43)</sup>そのため多くの人は自分よりも本来劣る自然に溺れてしまう。

「……自然は、その起源をあの知性界にもっていて、明らかに『善』つまり『美』から生じたものなのである。……彼らがこの感性界の美からあの知性界の美を想起し場合によっては、この感性界の美を映像として愛していることになるが、知性界の美を想起することがない場合には、我が身に何が起こっているかを知らないで、この感性界の美を真実のものと思い込んでしまう」<sup>44)</sup>

このことについてプロチノスは三種類の人間を挙げている。<sup>45)</sup>

—— すべての人間はまず感覚の対象に直面する。多くの人は感覚的事物に留まり、そこからもたらされる快を貪ることで一生を終えてしまう。それは、せつかく翼がありながら、食べ過ぎで身が重くなり飛べなくなった鳥のようである。その典型が快楽主義を唱えるエピクロス派である。

—— 別の人々は靈魂の中のより良い部分に駆り立てられて、快楽を棄て、もっと美しいものへ飛翔しようとする。しかし力が弱くて地上に戻り、やむなく実践的な事柄に甘んじる。それが禁欲主義を標榜するストア派である。

—— 第三の人たちはもっと強い力と鋭い眼力を具えた神的な種族である。彼らは上方の輝きを直視し、そこへと翔け上がり、そこを自分の本来の居場所として享受する。それがプラトン派である。

我々は単なる靈魂ではない。その第一の部分である知性においては知性界に属する。そして、より優

れたものこそ本性上より先のものであるから、知性を働かせることこそ我々の真のつとめなのである。<sup>46)</sup>すると自分に知性があることを忘れ、この感性界に埋没してしまうことは悲惨に他ならない。

「このようにして靈魂は個別的な肉体に降下することによって、その虜となり、肉体の鎖に縛られ、感覚を通して活動し——というのも、その靈魂は肉体に降下したその時から、既に知性による活動を妨げられているからであるが——かくして『肉体という墓に埋葬されている』と言われ、『洞窟に閉じ込められている』と言われることになるのである」<sup>47)</sup>

まさに我々は、プラトンが喩える洞窟の底に幽閉された囚人なのである。そうなった原因は靈魂が肉体に入ったことにあるわけだから、この肉体から抜け出すようにしなければならない。となると、まずは何よりも物的なものを遠ざけるようにしなければならない。

「……靈魂の受動的な部分の浄化とは、諸々の不条理な影像から目覚めて、それらを見ないようにすることであり、分離は下位のものに傾きすぎず、下位のものについての表象を持たぬようにすることによって可能となるのである」<sup>48)</sup>

つまり一見した限りでは魅力的な自然の諸事物に心を奪われないようにすることである。そのために肉的な快樂を遠ざけることで靈魂を自然界から分離せしめるようにしなければならない。

「靈魂の浄化 *katharsis* とは……肉体からの分離以外の何だろうか」<sup>49)</sup>

かくして靈魂の本来の場所への旅が始まる。つまり一者への還帰 *epistrophē* である。

先に見たように人間の靈魂には知性的、理性的、感覚的の三部分がある。プロチノスによれば、このうち肉体の内にある感覚的部分というのは実は眠っている部分である。すると浄化を通じて物質的なものを遠ざけることは、肉体に埋もれている部分の活動を抑制することであるから、それにより逆に靈魂は眠りから覚めることになる。ゆえに靈魂の「本当の目覚めとは本当に肉体から出て起き上がること」と言われる。<sup>50)</sup>

こうして目覚めて、肉体の中から起き上がった靈魂はそれまでとは別のものになっている。

「……靈魂は浄化されると、エイドスとなりロゴスとなって、まったく肉体のないもの・知性的な

もの *noera* となり、すっかり神のようなものとなるのであって……」<sup>51)</sup>

こうした非物体的状態の靈魂についてプロチノスはこう述べている。

「浄化とは、靈魂が自分以外のものに目を向けることをせず、……自分に縁のない臆測 *doksa* をもつこともしないで純粋に自分だけの状態を保ち、他と交わらず、影像に目を向けることもしなければ、影像から情念を作り上げることもしないことである。そこで、もし靈魂が下位のものから上位のものへと向かうとすれば、どうしてその上昇が靈魂にとっては浄化やそれに(下位のものもしくは肉体からの)分離でないことがあるのか。その時の靈魂はもはや『肉体のもの』としての肉体の中にあるのではなくて、濁った不透明なものから離れた光のようなものとなっているのである」<sup>52)</sup>

浄化によって肉体から起き上がった靈魂が「光のようなもの」になるとはどういう意味だろうか。ここにあるのは照明 *ellampsis* という考えである。

「……かのところでは知性は他者の助けを借りてではなく、自分自身によって見る。というのも知性は外部を見るのではないから。だから知性は或る光で別の光を見るのだが、他者の助けを借りるわけではない。従って(知性である)光が(知性である)他の光を見るのであり、従って自己が自己を見るわけだ。さてこの光は靈魂の中で輝くときに(靈魂を)照明する。すなわち知性的なもの *noera* にする。すなわち(靈魂を)上方の光である自己に似たものとするのである」<sup>53)</sup>

物を見るとき、我々は目を開けねばならない。だが真っ暗な部屋ではいくら目を大きく開けても見ることはいかならう。なぜなら光がないからである。見るということは対象が反射する光を受け取ることなのだ。すると、ものを見るためには、単に目を開けるというだけでなく、光が必要であることがわかる。同じ理屈が物ではない非物体的なものにも当てはまるとプロチノスは主張する。

—— 知性もまた見るためには光が必要である。ただしそれは感性界に属する太陽光ではない。知性界は靈的光で見るのだ。

—— その光は知性の外から射し込まれるのではない。知性界においては時間も方向もないのだから。するとその光は始めから知性界にあるのだ。

知性界にあるのは、一者を除けば、アイデアや神々などの知性的実体である。これらはすべて一者から直接に流出したものである。すると知性界に遍照する光は一者によるものと考えられることになる。

「……靈魂は、いやしくもそれが第一者によって充実され照明されるためには、その妨げをするようなものが一つでもそこに潜んでいてはならないとすると、いかなる形相も有することのないものとならなければならない。そうすると、あらゆる外なるものから身を引いて、内部への全面的転向を必要とすることになる」<sup>54)</sup>

以上をひとまず整理しよう。

(1) 浄化とは感覚的事物との接触を減らすことで、いわば心の向きを**外から内へ**と切り替えることである。

(2) それにより靈魂の重心は感覚的部分から知性的部分に移る。知性的部分には常に知性界に留まっているから、靈魂は知性界へ**上昇**する。

「英知とは魂を感性界から転じて知性界へと導く知性活動のことである。(しかるに感性界から知性界へ導くのが浄化なのである……)」(1-6-6, p.291)

(3) 知性界では靈魂は知性として、一者の光に**照明**される。それにより靈魂は知性界のアイデアなどを観照する。

「それゆえ我々はさらに、すべての靈魂が欲し求める善をめざして昇っていくようにしなければならない……だが、ここに至るには我々が(感性界に)降下して身にまとったものを脱ぎ捨て、上の世界に方向を転じて昇っていかなければならない。……そして、このようにして昇りながら、神に縁のないすべてのものを通過し、純粋な自分に戻るならば、純粋単一で清浄な善をありのままに観ることができるのであって、この善こそ、すべてがこれに依存し、これを眺め、これによって存在し、生き、思惟するところのものなのである」<sup>55)</sup>

### 三節 神秘的合一

知性界に上昇した靈魂の旅は続く。これについてプロチノスは言う。

「……靈魂は、現前するものよりももっと上位のものが何かある限りは、愛 *erōs* を授けたもの(善)によって高められて、自己の本性によって高く上昇する。だから靈魂は知性をも踏み越えて昇って

いくのだが、しかし善を超えて突き進むことはできない。それを超えたところに位置するものは何もないからである」<sup>56)</sup>

つまり覚醒し照明を受けた靈魂は知性さえも超えていくのである。なぜなら「我々の求めているものは一なるもの」<sup>57)</sup>だからである。ゆえに靈魂は知性界のアイデアの観照で甘んじることなく、最終的には一者をも直知しようとする。しかしここに最大の困難が待ち受けている。

—— 我々の能力には限界があるから、一者本来の性質を見出すことはできない。だから「一者は美である」とか「一者は莊嚴である」とか言うように、一者より下位のものどもが持つ性質を転用するという方法でしか一者について語りえない。<sup>58)</sup>

—— だが、そもそも下位のものどもが持つような性質は一者にはない。なぜなら一者は源として、それら以前であるから。ゆえに一者には実のところ説明 *logos* も感覚 *aisthēsis* も知識 *epistēmē* もありえない。一者は述語づけ不可能なのである。<sup>59)</sup>

このように何一つ語り得ず、直知できない一者を我々はいかにして認識できるのだろうか。プロチノスによれば、それは「学問的知識 *epistēmē* によるのではなく、また他の知性対象 *noēta* のごとく、知性の直知 *noēsis* によるのでもない。それは知識以上の直接所有 *parousia epistēmēs kreittona* の仕方」<sup>60)</sup>だそうである。原語のパルーシア *parousia* とは或るものの「現在」とか「到来」を意味する。つまり自分が対象に近づいて見るのではなく、向こうからこちらにやって来るのである。

「……この段階で人はすべての学びごと(理論)を放り出して……ほかならぬ知性自身のいわば波(のうねり)の如きものに引きさらわれて、いわば脹れ上がるそれ(波)によって高く揚げられて、どのようにしてかは分からないままに、忽焉として(かの者を)認めるのである」<sup>61)</sup>

自分でもよくわからないまま一者を認識しているとプロチノスは述べている。もちろん認識と言ってもそれまでのような直知ではない。彼によれば、一般に認識においては「認識している主体」と「認識されている対象」という差異が存在する。しかし認識が自然から靈魂へ、さらに靈魂から知性へと上昇していくにつれ、主体と対象の差異は縮まっていき、両者は緊密化と一体化の傾向を強めていく。<sup>62)</sup>そして

最終段階の二者ではついにその距離は零になるのである。

「すなわち、それは脱我 *ekstasis* であり、一体化 *haplōsis* であり、自己放棄 *epidōsis* であり、接触への努力 *epheis pros haphēn* であって、また静止 *stasis* であり、思念を凝らして彼への順応をはかることなのであって……」<sup>63)</sup>

二者は一である以上、それを認識するとき、そこには主体と客体という分離はあり得ない。だから自分とはもはや自分ではなく二者そのものである。

「かくて、そこに見ることができるのは、見ることが許される限りのかのものであり、また自己自身なのである。その自己自身は、知性的な光明に満たされて、光輝く自己自身であり、あるいはむしろ光そのものとなって清らかに、軽やかに、何の重荷もなく、神と化したというよりは、むしろすでに神であるところの自己自身なのである」<sup>64)</sup>

この脱我の境地をプロチノスは 263 年から 268 年の五年間だけでも四回体験したらしい。<sup>65)</sup> 弟子のポルピュリオスは生涯で一回だけだったようだから、プロチノスはもともと神秘家の資質に恵まれていたのだろう。加えて彼は日頃から精進に努め、食事は一日置きに少量で肉を避け、睡眠時間も短かく、行住坐臥から「自分が肉体を纏っていることを恥じている様子」<sup>66)</sup>と伝えられるほど靈魂の浄化に努めていた。彼がそこまで苦行を積んだのは感性界の苦しみから逃れるためだった。

—— 人間の靈魂は肉体から離脱すると、生前において最も優位を占めていた部分となる。だから感覚のみに頼った生き方をしていると、次は動物に生まれ変わってしまう。<sup>67)</sup>

—— だが靈魂の第一の部分である知性に導かれた生き方をすれば、その活動に応じて惑星や恒星に生まれ変わる。そこでまた優れた生活をすれば、さらに上方の世界へと昇っていくことができる。<sup>68)</sup>

まさに星から星への壮大な輪廻である。靈魂は精進を重ねることで感性界という牢獄から抜け出し、宇宙のはるか彼方へと還っていくのである。

「私はしばしば肉体(の眠りを)脱して(真の)自己自身に目覚め、他のすべてのものから脱却して私自身の内部へと入りこみ、ただただ驚嘆すべき素晴らしい美を観ることがあるが、この時ほど自分が高次なるものの一部であることを確信したことはなかった。その時の私は最善なる生

を生き、神的なものと(完全に)合一して、その中に自らの居場所を与えられ、あの最善の生命活動を通して他の一切の知性的なものを超えたところに自らを据えていたのである」<sup>69)</sup>

ちなみにプロチノスは晩年どうも懶を病んだらしく、最期はただ一人の医師に見守られて息を引き取った。その臨終の言葉は「我々の内にある神的なものを、万有の内なる神的なものの許へと上昇させるよう、いま私は努めているのだ」<sup>70)</sup>というものだったらしい。

### 第三章 人格神

#### 一節 超自然的ピュシス探求の条件

こうして見てくると西暦前後の頃、ピュシスの探求には大別して三つの立場があったことになる。

- (1) ピュシスを自然の中に求め、それは人間の理性で把握可能とする立場。それが原子論。
- (2) 人間の能力ではピュシスの把握は不可能ではないかと危惧する立場。つまり懐疑主義。
- (3) 自然を超えた次元にピュシスを前提し、それは神秘的な仕方では把握可能とする立場。新プラトン主義はその一例。

これらのうち(1)と(2)は我々がいま生きているこの世界の枠内に収まっているから、我々も通常の思考の枠内に留まっていればよい。だが(3)はこの世界を超えた次元を探求するわけであるから、普通の思考では駄目で、まず特別な前提を立てなければならない。

#### (その一) 靈的存在

第一には議論の出発点として、超自然的なるものの存在を認めねばならない。実際プロチノスもこう言っている。

「人によっては、存在の秩序は偶然により独りだけに作られるものであって、その統一は物体的な原因によって保たれているのだ、と信じている者があるかもしれないが、そのような者は神とか一者の認識とかいうことからは遠くかけ離れているのであって、我々もそのような人たちを相手に話をしようとするのではない。我々の

相手は、物体のほかにも他の種類のものの本性を認める人たちであり、靈魂への反省をもつ人たちでなければならない」<sup>71)</sup>

この言葉の前半が原子論者に向けたものであることは明らかである。原子論によれば、無数の原子たちが自らの重みにより落下することで巨大な渦が生じる。その渦の中で原子と原子が結合することで世界は生成したとする。この考えでいくと、存在するのは原子だけであって、超自然的なものなど何もないことになる。そうではなく「存在しているものには物質だけでなく霊的なものもある」と仮定する必要がある。そのうえで「ピュシスは物質ではなく霊的存在である」と信じなければならない。

### (その二)知性

そもそも哲学は自然現象の根底にあるピュシスの探求として始まった。そのためには現象のごく表層を捉えるだけの感覚に頼ってはならず、知恵と頭脳をふり絞り徹底的に理詰めで考えることが求められた。つまり理性である。デモクリトスなどはその典型であろう。また実際、原子論に代表される自然哲学ならそれで十分だろう。

しかしピュシスを超自然の次元に求めるとすると、それは物質ではないから、感覚はおろか理性を以てしてももはや捉えることはできない。するとどうしても、理性を超えた第三の能力が人間にはある、としなければならない。<sup>72)</sup>その結果、元来は論理的思考能力である理性を指していた「ヌース」*nous* は徐々に第三の能力である超自然的認識能力を意味するようになっていった。この新しい意味でのヌースについては理性と区別して知性としよう。要するに超能力である。

### (その三)霊的照明

ここまでを整理すると、(1)超自然的次元にあるピュシスは霊的存在であり、(2)そうした超自然的なものを認識するために人間には理性とは別に知性という超能力が具わっている、という前提がなされた。だがそうすると誰でも疑問に思うだろう。

——ではなぜ、誰にも知性があるのに、誰もが知性を使えるわけではないのか？

答えは当然「知性は、理性とは異なり、肉体を用いない認識能力だから」であろう。理性とは言うなれば「感覚を通して得られたデータを基に、思考することにより、対象を把握する能力」であるから、

その対象になるのはあくまで感覚で把握できるもの、つまり物質である。これに対し知性は「物質ではない存在を、感覚を通さずに、把握する能力」ということになるから、それを用いるためには感覚の雑音を抑え込まねばならない。一者への還帰について述べた件でプロチノスはこう言っている。

「この旅をなしとげるのに必要なのは、我々の足ではない。……言うなれば眼を閉じて *mysantopsin*、万人が持ちながら僅かな人しか用いていない別の眼へと切り替え、目覚めさせるべきである」<sup>73)</sup>

一者は肉眼ではなく心の眼で見えるしかないから、そのためにはまず肉眼を閉じろ、というわけである。このことから、つまり目を「つぶる」とか口唇を「閉ざす」を意味するギリシア語の動詞「ミュエイン」*myein* から、**神秘主義** *mysticism* という言葉が誕生した。まことにそれは「目をつぶって見ろ」という逆説的主張である。

しかし知性という心の眼が開かれるだけでは真理は見えない。二節で述べたように霊的な光が与えられねばならない。今これが超越的なアイデアを認めないアリストテレスなら「視覚は物を見るために必要な光を周囲の空気から受け取るが、靈魂は真理の認識に必要な光を学問から受け取る」と述べていたそうだから、<sup>74)</sup>我々は正しく筋道を立てて学んでいけば理性だけで真理を把握できることになるだろう。だがプロチノスはあくまでプラトン主義者であるから、(1)感性界の物体を超えた霊的存在を認めるし、そのことから(2)理性とは別の能力として知性も認める。さらに(3)照明説にも忠実に従う。<sup>75)</sup>

かくして、これら三つの前提が揃って初めて人間は超自然的ピュシスを認識できると言いたいのだが、残念ながら生来、懐疑的な筆者は最後の(3)になお一抹の不安を感じる。

——いくら目を開いても、太陽が光を与えてくれなければ、我々は何も見えない。それと同じで、いくら知性を研ぎ澄ましても、霊的な光が与えられなければ、超自然的なピュシスは認識できない。

——すると我々に霊的な光を与えてくれるのは何か。超自然的ピュシスしかない。しかし超自然的ピュシスが我々に霊的光を与えてくれる保証ははたしてあるのか。

こう考えると**超自然的ピュシスは単に霊的とい**

うだけでなく、我々の認識を助けてくれる存在でなければならないことになろう。すると次第に要請されるようになっていったのが人間に恩恵を与えてくれる慈悲深い神である。アリストテレスの「不動の動者」は恒星天の彼方に超然としていて、自分で自分を眺め、それ以外には全く無関心な神だったが、そうではない、血の通った人格的な神である。

## 二節 秩序賦与者

アレクサンドロス大王の東征により世界が拡大したヘレニズムの時代、東西の文明が融合したことにより、哲学においても従来の原子論やプラトン哲学、アリストテレス哲学に加えて、原子論に立脚したエピクロス哲学、ヘラクレイトスのロゴス概念を採用したストア哲学、さらには東方より神秘思想が流入し、まさに百花繚乱の様相を呈した。そうした中で懐疑主義に陥る人もいる一方で、逆に人格的な神の存在を積極的に認める人も増えていった。

一例としてローマの哲学者キケロ(前 106-前 43)の『神々の本性について』を見てみよう。同書は前 45 年に執筆されたもので原子論を奉じるエピクロス派、神の摂理を唱えるストア派、そしてアカデメイア派が紹介されている。エピクロス派は言う。

—— 神が世界を創造したなんてプラトンは言っているが、そんなのはプラトンの夢物語だ。そもそも神々は卓越した存在なんだから、奴隷みたいに仕事するわけがない。だから宇宙は自然に生成したのであり、神々はこの世界には無関心なのだ。<sup>76)</sup>

これに対しストア派は批判する。

—— エピクロス派は神々を卓越したものと認めているが、人間への配慮はないと言っている。それは間違いだ。神々はこの世界に配慮して恩恵を与えてくれている。なぜなら親切や恩恵ほど卓越した徳はないからだ。<sup>77)</sup>

『神々の本性について』はストア派の主張が多くを占め、著者のキケロも曖昧ではあるがストア派の見解に好意的な態度を見せている。<sup>78)</sup>では彼らストア派が神の摂理を主張する根拠は何だったのか。

「……私たちが天を見上げ、天体を観察するとき、これを支配する卓越した精神の働きほど明白で明らかなものがあるだろうか」<sup>79)</sup>

つまり宇宙には壮大な秩序がある以上、それを作り出したものがあるはずだと主張するわけである。

これが対立するエピクロス派なら、確かに神々の存在を認めはするが、人間界からは無縁とされる。<sup>80)</sup>世界は無数の原子が結合してできた偶然の産物で、神の創造などないとする。<sup>81)</sup>しかしストア派はそんなことは不可能だと一蹴するのである。

「一定の速度で回る天体の回転運動や、太陽や月、その他すべての星に見られる差異や多様性、美や秩序などであり、これらの外観はそれ自体が決して偶然に生まれたのではないことを如実に物語っている。たとえば誰かの家や体操場、中央広場に出かけ、目にするものすべてが一定の法則、様式、規律に基づいてできているのを見る者がいれば、彼はそれらが何の根拠もなく生まれたとは考えられず、むしろ全体を統率し指示する者がいると判断するであろう。まして、かくも大きな(天体の)運動と変化、かくも多様で大規模な事物の秩序を見れば……自然界のこれほど大きな運動は何らかの精神活動によって支配されていると結論づけるであろう」<sup>82)</sup>

このように自然界に一定の秩序が見られることから、そうした秩序を賦与したものの存在を主張する論理は今日では**デザイン論** Design Argument と呼ばれている。確かに自然に目を向けるとき、誰もがそこに巧妙な合目的性を見つけるだろう。何のことも分からないなら鏡を見るがよい。

—— どうして眉毛は目の上にあるのか。それは「目に汗が入らないように」という目的のためだ。

—— どうして前歯は鋭く、奥歯は平らなのか。それは「まず前歯で噛み切り、次に奥歯で潰す」という目的のためだ。

誰もがうなずくであろう。しかし、これをエピクロス派が依拠する原子論で説明できるだろうか。大変な困難にぶつかるはずである。そこでデザイン論は唱えるわけである。

—— 仮にエピクロス派が主張するように原子の偶然の衝突で世界ができたとするなら、目の下に眉毛がある人間や、前歯が臼歯になっている人間がいてもいいはずである。ところが実際にそんな人間はいないということは、目の上に眉毛があることや前歯が鋭く奥歯が平らなことは偶然ではないということだろう。偶然でないとなると、誰かがそのように定めたと考えるしかない。つまり自然の世界を今

あるように秩序づけた者がいたわけである。  
それが神である。

今なら進化論で説明をつけられるが、当時はダーウィンの自然選択の原理を発見するに先立つこと2000年も前だった。どのようにして合目的秩序が自然に発生できるのかを説明できない以上、秩序賦与者を想定するしかないだろう。

かくして時代が進むにつれて、原子論とそれに依拠したエピクロスの哲学は次第に振わなくなっていた。次の章で見るアウグスチヌスが活動した四世紀末には、エピクロス派はほとんど消滅していたようである。<sup>83)</sup>理由はただ一つ、自然界に見られる合目的秩序を説明する妙案が見つからなかったからである。

確かに自然界の驚異を目にすれば、その奥底に何かの配慮のようなものを感じるのは自然なことだろう。すると次第にこの合目的性の論理を世界そのものに当てはめる人も出てこよう。

—— この世界に秩序を与えた方が存在するなら、  
その方がこの世界を創造した目的とは何か。  
それは人間のためではないだろうか。

こうした人間中心的世界観に立つと、神は人間に対し特別の配慮をしていることになるはずである。

### 三節 ヘブライズム

哲学が秩序賦与者として神の存在を認めつつあった西暦前後の頃、西洋思想に全く新しい流れが見られるようになった。すなわちユダヤ思想である。思想史では両者を区別するために、理性による論理的思考を重んじる従来からのギリシア思想をヘレニズム、ユダヤ教とそれより派生したキリスト教をヘブライズムと呼ぶ。

前13世紀から12世紀にかけて現代のパレスチナに定住したと推定されるユダヤ人の社会はギリシアとは全く異なるものだった。

ギリシア人の場合、他民族との交流を通して自らの慣習(ノモス)の相対性に気づくと、神々の言葉を盲信するのを止めて、理性によりノモスの中のピュシス(本性)を探ろうとした。

これに対しユダヤ人は、様々な神を信奉する周辺民族の中にあって、自らが選んだヤハウェ神に固執した。これは、強大な大国と大国の谷間にあって民族の一体性を守ろうとすれば、止むを得ない選択だったのかもしれないが、その結果、多くの神々の中

の一つにすぎなかったヤハウェはいつしか唯一絶対の神ということになった。

「私をおいて神はない」<sup>84)</sup>

その神は天地万物の創造者である。神が創造した以上、この世界はギリシア人が考えるような悪いものではない。善いのである。

「神は自分が造ったすべてのものを見た。それは極めてよかった」<sup>85)</sup>

このようにヤハウェは自分が造ったもの全てを愛顧する神である。すると当然、神の慈愛は今この瞬間もすべてのものに注がれていることになる。

「あなたは存在するものすべてものを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかったはずだ。あなたがお望みにならないのに存続し、あなたが呼び出されないのに存在するものが果たしてあるだろうか。命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはすべてを愛おしまれる」<sup>86)</sup>

ここに、つまり母が子を慈しむように神も自分が創造した世界に愛情を注ぐという点にヘブライズムの特徴がある。世界を超越した永遠の存在という点ではギリシア哲学の神も同じだが、哲学の神はあくまで天の彼方に超然としており、儂く汚らわしい地上の世界に関わることはない。これに対しユダヤの神は有名な「紅海の奇蹟」に象徴されるように進んで地上に介入し、人間に恩恵を与える神である。

「主は恵みに富み、憐み深く、忍耐強く、慈しみに満ちておられます。主はすべてのものに恵みを与え、造られたすべてのものを憐れんで下さいます」<sup>87)</sup>

だが、このような恵みの神であるにもかかわらず、ユダヤの国勢は振るわなかった。前10世紀に入ると王国は南北に分裂、前721年には北王国が滅亡、前596年にはエルサレムが陥落し、ついにユダヤは亡国の民となってしまった。神に選ばれた民のはずなのに現実には異国で捕囚の身となると、本当ならヤハウェとか神の民といった考えを疑うべきなのだが、ユダヤ人たちは逆に現実の不如意を正当化する理屈を捻り出した。

—— 国が亡びたのは、我々が特別な使命を持つからこそ、神が与えた試練なのだ。

これにペルシアのゾロアスター教に由来する善悪二元論、救世主、世界最終戦争、最後の審判、天国と地獄といった終末論的要素が加わり、いつしか神の恵みとはメシア、すなわちユダヤ民族を隷属から

解放し世界に冠たる民にしてくれる政治的指導者への待望に変わっていった。

「イスラエルは主によって救われる。それはどこしえに続く救い」<sup>88)</sup>

「私の恵みの業を、私は近く成し遂げる。もはや遠くはない。私は遅れることなく救いをもたらす」<sup>89)</sup>

「私の救いが実現し、私の恵みの業が現われるのは間近い」<sup>90)</sup>

もちろん、どれも全くの誇大妄想であるが、現実が惨めだからこそ、いつ来るのか分からない救世主への期待がユダヤ社会全体に広まっていった。

「見よ、私は使者を送る。彼は我が前に道を備える。あなたたちが待望している主は突如、その聖所に来られる」<sup>91)</sup>

これは西暦前 5 世紀後半と推定される旧約聖書最後の預言書『マラキ書』の一節である。「突如」現れると言うのであるから、それは明日かもしれないし百年後かもしれない。とにかく待つしかない。こうした期待と不安に包まれて数世紀が過ぎた。

西暦 6 年、ユダヤはローマ帝国の属州となった。それから二十余年過ぎた頃、ガリラヤ地方のナザレ村のイエス(前 6 頃-30)という大工が街頭活動を始めた。神を「わが父」と呼んでいたことからすると、ちょうどアテナイのソクラテスがしばしば神霊の声を聞いたように、この人物もまた異次元からの声が聞こえる特異体質者だったように思われる。彼は世の終りが近いことを人々に説き、医療活動などを通して貧しい人々のあいだに相当な支持を集めたようであるが、活動開始から二、三年ほどで政治犯として捕えられ処刑された。

この人物について、同じ一世紀に生きたユダヤの歴史家ヨセフス(37-100)はこう述べている。

「この時代にイエスという一人の賢い男が生存した。彼は不思議な業を行い、多くのユダヤ人と異教徒たちをひきつけ、そして身分の高い人たちの訴えによってピラトが彼を十字架で罰したとき、かつて彼を愛した人々は見捨てなかった。今日に至るまでなお彼に従ってキリスト信徒と呼ばれる人々の子孫は絶えることはなかった」<sup>92)</sup>

まことに歴史の逆説としか言いようがないが、イエスが処刑されたことにより、彼を支持する人々の結束は逆に強まった。かくしてイエスは神格化され、死から三日後に復活し、弟子たちの前に現れたあと、

天に昇ったという荒唐無稽な話がまことしやかに語られ信仰されるようになった。

—— 十字架に架けられたナザレのイエスこそ神が遣わした救世主である。

本来はユダヤ教の中の一分派が唱えたこの主張は東地中海沿岸の異民族にも広がり、処刑から 20 年ほどの一世紀半ばには既に帝都のローマでも信奉者たちの存在が社会問題になっていた。第四代皇帝のクラウディウスの治世(41-54)を記した記録にはこうある。

「ユダヤ人はクレストゥスの扇動により、年から年中、騒動を起こしていたので、ローマから追放される」<sup>93)</sup>

続くネロの時代(54-68)にはローマのキリスト教徒たちに一斉摘発が行なわれた。

「前代未聞の有害な迷信 *superstitio nova ac malefica* に囚われた人種であるクレストゥス信奉者たちに処罰が課された」<sup>94)</sup>

イエスを救世主と信じるキリスト教徒たちはローマ古来の神々を礼拝せず、またその結果として皇帝に対しても敬意を払わなかった。このことはローマが営々と築いてきた秩序への挑戦であるから、確かに社会としては有害であろう。二世紀初め、小アジアのビティニア属州に総督として赴任した小プリニウス(62-114)はトラヤヌス帝にあてた書簡において、多くの老若男女がキリスト教に入信している事態に強い憂慮の念を示している。

「この問題は、特にその危険を冒す者の多数のゆえに、陛下のご判断を仰ぐに値すると思われます。と申しますのは、大変多くの人々がこの危険 *periculum* の中に呼び込まれており、将来もそうであろうと思われるからです。この迷信の害毒 *superstitionis istius contagio* は都市だけでなく、町や村や田園にも浸透しているからです」<sup>95)</sup>

ここでも迷信である。多くの人々の心を捉えた迷信とはいったい何だったのか。答えは福音書を読めばおのずと分かる。

イエスの弟子たちは生前のイエスをあくまで政治的指導者と理解していたようで、彼がユダヤの王となった暁には高位顯官に引き立てられることを期待していた。<sup>96)</sup> しよせんは立身出世のために従っていたに過ぎなかったから、イエスが捕縛されるや彼らは一斉に逃げ出した。<sup>97)</sup> ところがイエスが処刑された後になってから、彼らは突如として宣教に立ちあがり、



迫害に怯むことなく「イエスこそ救世主」と人々に説き、次々に殉教していった。

何が彼らを変えたのだろうか。考えられる答えはただ一つ、死んだはずのイエスを目撃したからであろう。死からの復活という奇蹟を目の当たりにしたからこそ、死をも恐れなくなったのではないだろうか。

ただ彼らがいかに熱心にイエスの復活を証言したとしても、一般の人が否定するのは極めて当然である。西暦 50 年から 52 年にかけて二度目の伝道の旅に出たパウロはアテナイでイエスの復活を説き、人々の失笑を買った。

「死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、それについてはいずれまた聞かせてもらうことにしようと言った」<sup>98)</sup>

このときパウロの話をつめたアテナイの人々は、死体がそのまま復活すると受け取ったのである。だがそうではない。『ルカ福音書』によれば、復活したイエスは当時のエルサレムのすべての人々にはではなく、彼を信じていた弟子たちにのみ現れた。だから復活と言っても、それは肉体ではなく霊的身体としての甦りだったと解すべきだろう。そして仮にその通りだったとすると、霊的なものが分からない者には、たとえ目の前にイエスがいても、まったく見えなかったであろう。すると必要なことは、この場合でもやはり霊的存在を信じることである。

イエスの復活 —— すなわち霊的存在はある。

だが理屈はそうだとすると、「いったん死んだ人間が霊的存在となって甦る」など常識から余りにもかけ離れているから、まさに前代未聞の迷信であろう。

それにもかかわらず、そのような迷信に民衆が靡いていったのは偏に実利があったからである。「すべての人間は神の像に向けて造られた」と主張して万人の平等を説く以上、キリスト教徒たちの集会では自由民も奴隷も同じパンを食べ、病弱者も身障者も博愛の心で遇せられた。福祉というものがなかった時代、死刑囚イエスを救世主として崇拝する教団は貧しい人々の駆け込み寺だったことだろう。だから庶民は福祉の輪に入るために「復活」という前代未聞の迷信を信じる素振りをしたのだろう。

問題は知識層である。哲学を学ぶだけの閑暇に恵まれた人なら、信徒同士の扶助はそれほど必要では

なかったと思われる。すると彼らがギリシア以来のピュシス探究から次第に人格神への信仰に移っていたのには実利以外の理由があったと推測できよう。それはいったい何だったのだろうか。

#### 四節 ユスティノスの場合

これについて一例として、最初のキリスト教哲学者と呼ばれ、二世紀半ばにローマで殉教したユスティノス(100 頃-165 頃)を見てみよう。

イスラエルの北部に位置するサマリア地方のギリシア人家庭に生まれた彼は小アジアのエフェソスに赴き、ストア派からアリストテレス派さらにはピュタゴラス派と思想遍歴を重ね、プラトン哲学に出会ってようやく満足を覚えた。

「……かくして非質料的なものの認識がまったく私を高揚させ、アイデアの観想が私の思念に翼を与えた。それゆえ僅かのあいだに私は自分が賢者になったと考え、愚かにも神を直接に見るのを望んだほどである。なぜならそれがプラトン哲学の目的だからである」<sup>99)</sup>

ある日、ユスティノスは海辺にたたずみ思索にふけていた。するとそこに一人の老人がやって来て対話が始まった。ユスティノスは哲学の素晴らしさを力説した。

—— 哲学と正しい理性(ロゴス)とがなければ人間に思慮分別は具わりません。ですから、すべての人は哲学を学ぶべきでして、哲学こそ最高の仕事なのです。<sup>100)</sup>

—— では、その哲学とは何ですか。どんな幸福を我々にもたらすのですか。<sup>101)</sup>

—— 哲学というのは存在するものについての知識 *epistēmē tou ontos* です。こうした知識を持つことで幸福が与えられます。<sup>102)</sup>

何度も繰り返すが、哲学は移ろいゆく現象の根底にある永遠不変なもの(ピュシス)とは何かについての探求として始まった。「永遠に変わらずにあるもの」を対象にする以上、ピュシスの探求は突き詰めていけば「究極的に存在するもの」についての問いかけになる。これはプラトンからアリストテレスについて我々が見てきた通りである。実際、老人もそこを衝いた。

—— それでは、あなたが言う「存在するもの」とは何ですか。<sup>103)</sup>

—— 常に同じ様に同一であり、他のすべてのものの原因です。それは実は神なんです。<sup>104)</sup>

すると老人は疑問を呈した。

——でも知識というのは様々な事物に関して言われるわけでしょう。例えば練兵とか操船とか医療とかについて、それぞれ知識と言われるようにね。でも神についての知識なんて果たしてあるんですか。哲学者たちは神を見たことも聞いたこともないでしょうに。<sup>105)</sup>

——神は、我々が動物を見るときのように肉眼で見ることではできません。プラトンが言うように、ヌースで把握するしかないんです。<sup>106)</sup>

——ということは、予め感覚を通して把握していなかったものを、認識できる能力が人間にはあるというわけですか。<sup>107)</sup>

既に見たように、哲学の究極の対象である「存在そのもの」は、プラトンにせよ、アリストテレスにせよ、この世界を超えた彼方にある。これが世界の中にあるのなら理性で認識可能だが、世界の向こうにあるとされる以上、理性では届かない。そこで理性以外の能力が何かあるのかと質しているわけである。つまり知性のことである。ユスティノスが頷くと、老人は指摘する。

——ヌース(知性)が神を把握できるということは、そのような能力を持つ魂はこの世界を超えた性質を持っているということです。すると魂は本性的に不死ということになります。でもね、魂が不死なのは、魂それ自体が「生命そのもの」だからではなく、あくまで「生命そのもの」に与ることによって不死なんです。<sup>108)</sup>

これを聞いて、プラトン主義者を自認するユスティノスは動揺する。プラトンでは靈魂不滅がはっきりと説かれているのに、<sup>109)</sup>この老人は「靈魂はそれ自体としては不滅なわけではない」と言うからである。そこで靈魂不滅を説くプラトンやピュタゴラスが仮に正しくないとするなら、いったい誰に教えを請うべきか、と尋ねる。

——ギリシアの哲学者たちよりもずっと昔、神の霊を受けて語った人々がいました。それが預言者たちなのです。<sup>110)</sup>

そう言って老人は聖書を読むよう勧めて立ち去った。そこでユスティノスは聖書を読んだ。

「……私の魂の中にただちに火が点ぜられ、預言者たちとキリストの友人であるあの人々への愛が私を捉えた。彼の話を私は自分で斟酌してみ、これこそ唯一の確実で有益な哲学であることを見出した」<sup>111)</sup>

かくしてユスティノスはプラトン哲学からキリスト教へと回心し、キリスト教こそ真の哲学であると説くようになった。回心後の彼の哲学の核心はイエスを神と世界の仲介者と位置づけたことだった。

イエスは神のロゴスである。

この主張の根底にあるのは、イエスと同時代のユダヤ人哲学者フィロン(前20頃-前40頃)である。

ヘブライズムにおいては神が世界のすべてを創造したとされるが、ヘレニズムでは永遠なる神が儚いこの世界と接触することなどあり得ない。そこでフィロンは、ちょうどプラトンの『ティマイオス』において神であるデミウルゴスが自らの胸中のアイデアを眺めながら世界を制作したとされているように、「神は自らが思い描いた概念を通してこの地上世界を創造した」と考えた。そして世界の原型である、神の内なるこの概念をギリシア思想に倣いロゴスと呼んだ。そうすることで、つまり世界と神のあいだにロゴスを置くことで、神と世界が直接触れないようにしたわけである。

フィロンにとってロゴスはあくまで神の内にあっただが、原始キリスト教団は一世紀半ば以降、聖典を整備していく過程において「イエスその人こそロゴス」と唱えるようになっていった。その最初の現われは一世紀末と推定される『ヨハネ福音書』の冒頭である。

「始めに言葉があった。言葉は神と共にあった。

言葉は神だった。この言葉は始めに神と共にあった。すべてのものはそれによって造られた。それなしでは何も造られなかった」<sup>112)</sup>

このようにイエスが神のロゴスということになると、ロゴスとは本来ギリシア哲学の概念であるから、まだ回心していない哲学徒たちに「哲学とは本当はキリスト教のことなのである」と教えるのがユスティノスの使命ということになろう。そこで彼は150年頃、ローマに赴き、キリスト教哲学の塾を開いた。そして153年から翌年にかけて二冊の護教の書を執筆した。第一の書は時の皇帝アントニヌス・ピウスに、第二の書は元老院に宛てたものだった。

ユスティノスに言わせれば、ソクラテスにしばしば語りかけた神霊と、イエスとして地上に現れたロゴスは実は同じものなのである。

「このことはロゴスにより、ソクラテスを通じてギリシア人の前で論証されただけではありません。異民族のあいだでも人の形を取り、人間となり、イエス・キリストと呼ばれたロゴス自身によって論証されたのです」<sup>113)</sup>

言うなれば西洋版の本地垂迹説である。名前や現われ方は時代や地域で違っても、真理を語っているなら、それは同一のロゴスによるものとユスティノスは考えた。だから「ロゴスに与って生活した人々は、たとえ無神論者と見なされた場合でもキリスト教徒」<sup>114)</sup>とまで断言している。だがそうすると、そういうことを言うユスティノス自身について誰もが疑問に思うであろう。

—— 同じロゴスの現われと言うなら、なぜ彼は「哲学者」ではなく、社会から敵視されていた「キリスト教徒」をあえて名乗ったのだろうか。

答えは「人間の能力に限界があることを彼は痛感していたから」である。まず彼は、すべての人間には神から知力が授けられている、と言う。

「はじめに神は真理の選択と正しい行動のための知力、能力をそなえた者として人類を造られたので、すべての人は神の前に弁解の余地がありません。すなわち人間はロゴスの能力と洞察力をそなえて生まれてきたのです」<sup>115)</sup>

すべての人間が生まれながらに有するロゴスの能力については、第二の弁明書では「全人類に植えつけられているロゴスの種子」<sup>116)</sup>ともある。いずれにせよ、この能力を駆使して過去の哲学者たちは探求を続けてきたのであるが、彼らが得た知識は不完全なものだった。<sup>117)</sup>その理由は、彼らが拠ったのはあくまでロゴスの種子であり、ロゴスそのものではなかったからである。彼は言う。

「……前述の作家たちは皆、人間に植えつけられたロゴスの種子の内在に依存していたために、諸存在を不鮮明に見ることしかできなかったのです」<sup>118)</sup>

ユスティノスによれば、「ロゴスの種子」による認識とは模写 *mimēma* であり、認識する側つまり人間の能力の制約を伴う。だから、そうした認識は対象を在るがままに再現したものではなく、どうしても不正確な劣化コピーに留まらざるを得ない。これに対しロゴスそのものへの分有は違ふと彼は言う。

「言い換えるなら、或るものの種子と模写とは、それを受け取る側における能力の限界を伴って

いるのです。これに対し、或るもの自身への分有と模倣とは或るもの自身の側からの恵みによって起こるのです。この点でロゴス自身とその種子とは区別されます」<sup>119)</sup>

ここではロゴスそのものを分有することによる認識は模倣 *mimēsis* とされている。模写があくまで人間の能力によるものとされていたのに対し、こちらにはそのような説明はない。ということは、模倣は人間が作り出すものではなく、対象から人間に与えられるものと思われる。また実際そのように理解すれば「或るもの自身の側からの恵みによって」*kata charin tēn ap'ekēinou* という言葉が生きてくる。

すなわち模倣においては —— 人間が自分に具わったロゴスの種子で、つまり自力で、認識するのではなく —— ちょうど鏡に像が写るように、対象であるロゴスの側が人間の魂へ自らを投影するわけである。対象がそのまま写るわけであるから、模写のような不正確さはない。だから模倣の方が優れていることになる。

このように見てくると、ユスティノスが哲学者ではなくキリスト教徒と自認したのは「哲学では十分な認識はできない」と考えたからであることが理解できよう。人間に固有な認識能力はあくまでロゴスの種子であり、それには限界がある。だから絶対確実な知識を求めるなら、それは自己の能力の限界を超えた認識が与えられることを期待するしかない。それはまさに「恵み」*charis* である。そうした恵みを望むがゆえに、ユスティノスは超然として冷淡なギリシア哲学の神からキリスト教の恵みの神へと回心したわけである。

## 第四章 哲学から神学へ

### 一節 アウグスチヌスの回心

このような哲学からキリスト教への回心において最も有名な例はなんといってもアウレリウス・アウグスチヌス(354-430)であろう。西欧キリスト教思想の父とも言うべきこの人物はなぜキリスト教に回心したのだろうか。

アウグスチヌスは西暦 354 年、アフリカ属州(旧カルタゴ)のタガステに生まれた。父のパトリキウスはキリスト教とは無関係だったが、母のモニカは敬虔なキリスト教徒だった。

十六歳でカルタゴに出て、雄弁術を学んでいたアウグスチヌスは十九歳のとき、キケロの対話編『ホルテンシウス』を読み、哲学に強い関心を持つようになった。

「実にこの本が私の精神を変え、主よ、私の志向をあなた自身に向き変え、私の希求と願望を一変させました。……信じられないほどの燃えたつ心で滅びることのない知恵を慕い求めました。そしてあなたの許へ帰るために立ち上がり始めました」<sup>120)</sup>

同書は伝わっていないが、『告白』の記述によれば、キケロの時代の様々な学派を挙げて論評し、知恵そのものの探求を促していたらしい。<sup>121)</sup>アウグスチヌスとしては幼少のころから「知恵」とは聖書の神のことだと母から聞かされていたのだが『ホルテンシウス』のどこにも神を暗示するものはなかったので、さっそく聖書を手にとったが、キケロの文体とは比ぶべくもなかった。失望した彼が代わりに近づいたのは当時、流行していたマニ教だった。

マニ教はペルシアのマニ(216 頃-277 頃)が創始したもので、ゾロアスター教を下地に仏教やキリスト教やギリシア哲学の要素を多分に取り入れた善悪二元論の哲学的宗教だった。

—— 世界は光の国の支配者である善神と闇の国の支配者である悪神の闘争の場であり、すべての現象は善と悪の二原理の拮抗によって起きている。

—— 人間の魂は善であるが、肉体という悪の中に閉じ込められている。そこで神はアブラハムやゾロアスターやブッダやイエスなどの預言者を地上に遣わし、魂を救済しようとしてきた。その最後にして最高の預言者がマニである。

—— マニの教えを聞くことで、魂は神の光を浴び、それにより心の目が開かれ、悪しき肉体の欲望に打ち勝ち、救済される。

知恵を切望するアウグスチヌスに、マニ教徒たちは聖書と同じ神やイエスの名を持ち出し、キリスト教の様々な不合理を衝いた。それらの中でも彼が最も同調したのは「なぜこの世界には悪があるのか」という問題だった。<sup>122)</sup>

もともとアウグスチヌスは母の強い影響により、神が存在することは疑っていなかったが、その神をあくまでも空間内に広がりを持つ永遠不滅な物質として理解していた。<sup>123)</sup>

—— 神は人間のような恰好をしているわけではないが、存在している以上は、空間に場所を占めている。<sup>124)</sup>

—— 神は創造したすべてのものを取り囲み、浸透している。すべての被造物は善なる神に満たされている。<sup>125)</sup>

—— それでは現実の悪は何に由来するのか。善なる神が悪いものを造るわけがない。すると何か別の悪い原理が存在していると考えられない。<sup>126)</sup>

かくして神を悪に関与させるわけにはいかないと敬神の念ゆえに、アウグスチヌスはマニ教の善悪二元論に納得した。そうなった原因は、本人も述べているように、存在といえば物質しか考えられなかったからである。

「…… 私自身の神について考えようとしても、形ある物体としてしか考える術を知りませんでした。とにかく私はどんなものであれ、物体でないものは存在しないと思えたからです。これが私の避けることのできなかつた誤りの最大の、おそらくは唯一の原因でした」<sup>127)</sup>

しかしカルタゴで修辞学を教えるかたわら多くの自然哲学の書物を読んでいくうちに、次第にマニ教の説くところよりもこれらの自然哲学の方がもっともらしく思えるようになった。マニ教の天体論が作り話に満ちているのに対し、自然哲学は日蝕や月蝕などを正確に予測していたからである。もっとも自然哲学は被造物には多弁でも、その作者である神については沈黙していたから、<sup>128)</sup>知恵そのものを希求するアウグスチヌスはさほど関心を寄せなかった。<sup>129)</sup>383 年の夏、アウグスチヌスはローマに移った。依然、マニ教との交流は続いていたが、それはもはや憎性にすぎなかった。<sup>130)</sup>そうなるや懐疑の念が頭を擡げてくるのも当然である。アカデミア派つまり懐疑主義の言うところが一番まともではないだろうか、と思えるようになり、<sup>131)</sup>精神的に無為な状態に陥ってしまった。<sup>132)</sup>

翌 384 年秋、彼は公儀の修辞学教師としてミラノに赴任した。この時、彼はもはや「教会の中に真理を見出すことに全く絶望」<sup>133)</sup>していた。つまりキリスト教もマニ教も信じていなかった。しかし、さりとて懐疑主義が言うような判断停止による無動揺の境地に安住する気もなかった。真理を断念する気にはどうしてもなれなかったし、<sup>134)</sup>それどころかむしろ

る知恵の探求に専念したい気持ちが日増しに強くなっていった。<sup>135)</sup>

そんな中の386年の5月、アウグスチヌスはある人の勧めで「プラトン派の書物」を読んだ。<sup>136)</sup>実はそれはプロチノスの論文集であったのだが、当時は新プラトン主義もプラトン派と一括りにされていた。読み進めていくうちに彼は聖書と重なる内容が多くあるのに気づいた。<sup>137)</sup>

新プラトン主義によれば、すべてのものは一者からの流出である。一者は善であるから、存在するものは程度の差はあれ、すべて善である。同じことはキリスト教にも言えるのではないか。というのは彼には昔から一つの確信があったからである。

—— 不滅なものは滅びゆくものより優れている。  
当然、神は不滅なものである。さらに善なるものでもある。<sup>138)</sup>

すると、神である不滅の善は、滅びゆくものより優れていることになろう。さて、いま仮に滅びゆくものを悪とすると、滅びゆく悪には不滅である神を損なう力などまったくないはずである。となれば、善である神とは別にあって悪の原理を立てる必要などなくなる。マニ教の善悪二元論は神に一元化できるのである。

「滅びるものも善いものです。もし、それが最高の善なら、滅びることはありません。もし、それが善でないなら、滅びることさえできないでしょう。なぜなら、もし最高の善なら不滅ですし、もし善でないとしたら、そのなかに滅びるものが何も存在しないからです。なぜなら滅びるとは損なうことですから、善を減らすのでなければ、損なうことにはならないからです」<sup>139)</sup>

ここでは最高善が不滅の存在であることが述べられている。すると当然、滅びることは悪である。裏返せば、存在することは、たとえそれが取るに足りないものであっても、存在である限りで善と考えられるべきなのだ。

「それゆえ、善が奪われてしまうなら、それらは完全に無くなるでしょう。従って、それらが存在している限り、それらは善なのです。それゆえ、それらが存在しているものであるなら、それらは善なのです。私がその由来を問うていたあの悪は実体ではありません。というのは、もしそれが実体であれば、善であるはずだからです」<sup>140)</sup>

こうして新プラトン主義から示唆を受けたアウグスチヌスは、神を最高善である不滅の存在とし、存

在の減少を善の減少と理解することにより、悪を善の欠如つまり非実体と考えることができるようになった。マニ教の二元論から完全に脱却したのである。

では新プラトン主義の観点からキリスト教を再検討したらどうなるか。そこで彼は聖書の中のパウロ書簡を読んでいった。<sup>141)</sup>するとプラトン派の書物に書かれていたことはすべて聖書にもあること、それも神の恩寵への讃美と共に語られていることに気づいた。<sup>142)</sup>その一方で救済者としてのキリストの受肉はプラトン派の書物のどこにもないことが分かった。<sup>143)</sup>ということは新プラトン派とキリスト教の違いは詰まるところキリストの有無ということになろう。

新プラトン主義 + キリスト = キリスト教

もはや真理が何であるかは分かった以上、<sup>144)</sup>あとは神の受肉を認めるか否かだった。逡巡を重ねたのち同年8月、アウグスチヌスは神の受肉を信ずる決心をした。つまり「イエスは地上に現れた神である」と認めたのである。いったい、なぜアウグスチヌスはイエスを神と認めたのだろうか？

## 二節 真の哲学

回心直後の秋、アウグスチヌスは公職を辞し、11月にはミラノ北方のカッシキアクムの山荘に移った。ここで翌年4月の受洗までおよそ五か月間、仲間たちと共に思索と討論の日々を過ごした。

彼は力説する。

—— 我々は真なるものを知らなければならない。  
真なるものを知らずに、至福でありうるだろうか。<sup>145)</sup>

アリストテレスが述べているように、人間は本能的に知ることを欲する。そして知識を得たとき、喜びを感じる。そういう動物である。

そして何度も繰り返すように、**知るとは存在しているものについて知ること**だから、時間の中で生成しては消滅していく事物については、同じく一時的な知識しか得られない。そのような移ろいゆく知識では我々の喜びもまた儚い。すると至福つまり最高の喜びというのは、永遠不滅の存在についての知識ということになろう。実際、アリストテレスにおいても、天の彼方に存在する不動の動者こそ知識の最高の対象であり、それについて考究する形而上学こそ最高の学問とされていた。同じことをアウグスチヌスも言う。

「……人間は至福であるためには何を用意しなければならないであろうか。……そういうものは常に存続し、運命にも左右されず、どのような偶然にも従属しないものでなければならない。……神は君たちには永遠にして常に存続していると思われないか……それゆえ神を所有している人は至福なのである……」<sup>146)</sup>

まことに至福とは永遠不滅の存在である神を知ることであり、そうした神についての完全な知識こそ真理であり知恵なのである。ゆえに我々はただ神のみを求めるべきである。

「神よ、あなたの御許に帰り行くべきことこそ私の思いである。……私が知っているのは、流れ去る儚いものを蔑み、確かにして永遠なものを求むべきであるということのみである」<sup>147)</sup>

では、それはいかにして可能なのだろうか。アウグスチヌスは「哲学を通してだ」と明言する。

「……あのマニ教という迷信から私を完全に自由にくれたのは他ならぬこの哲学でありました。というのも、およそ死すべき眼によって認められるもの、またおよそ感覚によって知られるものは、何もかも決して崇拜されてはならないし、すべて軽蔑されなければならないことを、その哲学自身が教えてくれたのです。いや、真実を教えてくれたのです。最も真実にして最も秘められた神を明示することを約束し、しかも今たしかに、光輝く雲のようなものを通して神を私たちの眼に見せることができるものは、まさしくこの哲学なのです」<sup>148)</sup>

人間を神へと導くこの哲学とは、前節から明らかに、実は新プラトン主義であり、それをアウグスチヌスは当時の慣習に則りプラトン哲学と呼んでいた。<sup>149)</sup>このように(新)プラトン哲学に対するアウグスチヌスの評価は非常に高かったが、問題は哲学できるほどの能力のある人は少ないことだった。

「そこを出発するとただちに至福の生の国や土地へと通ずる哲学の港へ私たちを導くものは、理性によって決められた航路と意志自身であるとしみますと、……この港にたどり着く人々はきわめてまれであり、非常にわずかなのです」<sup>150)</sup>

哲学を通じ至福へ至るのが万人の道なのだが、その哲学へと自力で、つまり自らの理性で、歩んでいける人は少ないとなると、そうでない大多数の人々を哲学へと向かわせる必要がある。そこで彼が挙げるのが**権威**である。

—— 学ぶために私たちは必然的に二つの道により導かれる。すなわち理性と権威である。<sup>151)</sup>

—— 無教養な多くの人々には権威が有効であるが、教育のある人々には理性の方がより適している。<sup>152)</sup>

だがこれとてもよく考えてみれば、教育ある人間も最初は無教養な状態から始まるわけだから、結局すべての人に真理の門を開くのは**権威**ということになる。<sup>153)</sup>彼によれば理性と権威のうち時間的に先行するのは権威である。<sup>154)</sup>だから我々は権威を信じることから始めねばならない。哲学はそのあとである。

ではその権威とは具体的には何なのか。

「人間的知恵がどんな状態のものであれ、私がまだそれを手にしていないことを私は知っている。私はいま三十三歳であるが、他日それを自分の手にするであろうという望みを捨てるべきではないと考えている。……私たちは知恵を学ぶのに二つの強い力、すなわち権威と理性の力によって動かされているのを誰も疑わない。だが、どんな場合でも私は確かにキリストの権威から決して離れない。実際、それより以上に強力な権威を私は見出さないのである」<sup>155)</sup>

すなわち**権威とはキリスト**である。つまり「処刑されたイエスは神である」と信じることであり、それはつき詰めればイエスの復活であり霊的存在の承認である。感覚的な存在しか認めない者には確かに前代未聞の迷信だろう。しかし、だからこそ、つまり感覚や理性では把握できないからこそ、まず信じるしかないのである。そうした権威の門を経ずに、いきなり理性で理解しようとする態度をアウグスチヌスは**秩序** *ordo* という観点から非難する。その秩序について彼はこう述べている。

「すなわち秩序とは、もし私たちが人生においてそれを保持しておくならば、私たちを神へ導くものであり、また、人生においてそれを保持することがなければ、私たちが神に至るところのないものである」<sup>156)</sup>

すると**神へと至る秩序とは一に権威、二に理性**ということになるろう。権威ぬきに、純粋に理性だけで理解しようとするればどうなるか。

—— 「魂の起源はどこにあるのか」、「魂はこの世で何をなすべきか」、「魂は神からどれほど離れているか」、「魂にはどんな固有の本質があるのか」などはすべて偉大な秩序に属

する。だから軽々しく、学問の秩序もなしに、これらの事柄について認識しようとするなら、研究者の代わりに好奇心屋に、学者の代わりに盲信屋に、慎重な人の代わりに不信屋になるだけだ。<sup>157)</sup>

まさに世界に秩序があるように、学問にも秩序があるのであり、ゆえにまず権威を信じなければならぬのである。すると過去のアウグスチヌスはこの秩序を踏み外していたことがわかる。権威ぬきに、いきなり理性だけで確実な知識を得ようとしたため、唯物的なマニ教の二元論に賛同してしまったのである。回心から五年後の『信の効用』では、そのことをはっきりと自覚して述べている。

「……私たちがいる人々(マニ教徒)の仲間ひきずり込まれた理由は、彼らが、恐ろしい権威を切り捨て、ただ単純な理性のみによって、自分たちの言うことを聞こうと望んでいる人々を、神に導き、かつすべての誤謬から解放すると公言していたからにほかならなかった。いったい私が、子供の時から両親によって植えつけられた宗教を軽蔑して、九年間あの人々に従い、かつあの人々の言うことに熱心に耳を傾けざるを得なかったのは、彼らが、私たちは迷信におそれ従い、理性以前に信仰を持つように命じられている、しかし自分たちはあらかじめ真理について議論し、これを明らかにするのでなければ、誰一人として信仰をおしつけるようなことはしない、と言っていたということ以外のどんな理由であっただろうか」<sup>158)</sup>

まことに 386 年夏の回心とは神へと至る秩序に復帰することに他ならなかった。それによりキリストの権威を認めた以上、あとは理性を通して至福へ進むのみだった。となれば回心後、彼がカッシキアムに隠棲したのは最終的に真理の認識に至るまで哲学を完遂する意図があったと思われる。また実際そう考えると、最終的に真理を認識する道のことを彼が「真の哲学」と述べていることも別に奇異なものではなくなる。これについて彼はまず「今日ではキュニコス派、ペリパトス派、プラトン派以外に哲学者はない」と前置きしたうえで次のように述べる。

「…… 唯一の真の哲学の学問 *una verissimae philosophiae disciplina* がついに濾し出されるに至っている。……それがなぜ唯一の真の哲学の学問というかといえば、それは私たちの聖なる教えがきわめて当然にも非難しているこの世の哲

学ではなく、別の英知界の哲学だからである。だが、この哲学のきわめて精密な論拠でさえも、さまざまな形の誤謬の闇によって盲目となり、身体によってひどく汚れている魂をこの哲学のもとへ呼びもどすことは、至高の神が人々へのある種の憐れみによって神的知性の権威を人間の身体へと向けたまい、そこまで降りたまわなければ、不可能であろう。魂はこの神的知性の戒めばかりでなく、さらに行為によっても鼓舞されて自分自身へ還り、議論の言い争いによらないでも、故郷を仰ぎ見ることができるであろう」<sup>159)</sup>

普通に考えれば「この世界を超えている英知界に属することがどうして哲学で分かるのか」と疑問に思うであろう。もちろん、そんなことはアウグスチヌス自身よく分かっていたから、それは最終的には「ある種の憐れみにより」*quadam clementia* つまり「真理である神が自らイエスという人間になって地上へ降りる」ことにより可能になると但し書きをつけているわけである。つまり世間に流布していた普通の新プラトン主義ではなく、あくまでも神の憐れみを見込んだキリスト教的新プラトン主義である。

真の哲学 = 新プラトン主義 + 神の憐れみ

この「神の憐れみ」とは「神が人間になったこと」であり、それはキリストであるから、この図式はこう書き直せよう。

真の哲学 = 新プラトン主義 + キリスト

すると、これは前節の「新プラトン主義にキリストを加えたのがキリスト教」と同じ図式になる。アウグスチヌスが言う真の哲学とはキリスト教のことだったのである。ということは彼は回心直後の時点ではキリスト教のことを宗教というよりも哲学として理解していたと言えよう。ちょうどユスティノスにとってキリスト教こそ本当の哲学であったように。

ではアウグスチヌスは実際に至福にたどり着くことができたのだろうか。

「……アカデミア派の人々と私とのあいだには次のような違いがある……彼らにとっては真理は把握されえないということが蓋然的であると思われるが、私にとっては、私はまだ真理を見出

してはいないが、知者 *sapiens* によって真理は見出されうと思われる……」<sup>160)</sup>

彼は真理をまだ発見していないと認めている。だが同時に知者なら真理は見出せるとも述べているから、キリスト教という名の哲学を通して神を認識する可能性を認めているわけである。またこうも言っている。

「精密な理性によって究められ明らかにされるべきことについては(というのは私は真なるものが何かを、信ずることによってだけでなく、また理解することによっても、手にしたいと性急に望んでいるような状態だったから)プラトン派の人々の中に、私たちの秘儀と矛盾しないものを私が見出すであろうと今は確信している」<sup>161)</sup>

筆者が指摘したいのはこの引用の括弧の部分である。「真なるものが何かを、信ずることによってだけでなく、また理解することによっても手にしたい」と望んでいる状態だったというが、原文は *ita enim iam sum affectus, ut quid sit verum, non credendo solum, sed etiam intelligendo apprehendere impatienter desiderem* であり、主節は *sum affectus* と現在完了形で表現されている。ということは「そんな気持ちになりつつある」のではなく、「今やそんな気持ちになった」わけである。だからアウグスチヌスは真理である神を今すぐ認識したいと本心から願っていたわけである。

以上からアウグスチヌスはカッシキアクムの時期においてはキリスト教を究極の哲学として捉え「キリストの権威を認めた以上は、哲学的思索を深めてゆけば、神の憐れみにより、遠からず真理を認識して少数派の知者になれる」と楽観していたことが窺えよう。

### 三節 真の宗教

権威の門をくぐり、イエスを神として認めるに至ったアウグスチヌスは思索を続けていった。

—— どのような仕方では神を知れば私は満足できるのか。<sup>162)</sup>

我々は何か新奇なものを耳にしたとき、「それはどのようなものか」と相手に尋ねる。その際、おそらく自分が既に知っている何か類似したものを挙げてくれるように頼むだろう。例えば洋食屋に行って「トチメンボーでも注文しようか」と言われたら、「何ですか、それは。メンチボールみたいなもので

すか」という具合に。ところが神の場合、それに類似した既知のものが我々には思い浮かばない。なぜなら誰も神に類似した何かを全く知らないからである。そこで彼は自問する。

—— 私は神を知らないのに、どうして「神に類似したものを知らない」ことを知ったのか。<sup>163)</sup>

ここから、つまり「或るものが別のものに似ている」という判断に注目することでアウグスチヌスは徐々にアカデミア派の懐疑主義を克服しようとする。これがアカデミア派なら「神の存在とか真理とは何かといったことは人間には分からないように思われる」と主張して判断留保する。その上で、生活上の方便として蓋然性とか似真性 *verisimilitudo* ということを判断の基準に挙げる。つまり「どうも人間には真理は分からないようだから、真理と思われるもので甘んじよう」と妥協するわけである。<sup>164)</sup> この似真性にアウグスチヌスは反発する。

—— 「真なるものが何であるか我々は知らない」とアカデミア派は言いながら、なぜか似真性と言う。<sup>165)</sup>

—— しかし、なぜ似真性と言えるのか。君の父親を見たことのない人が、君の兄を見たとして、「君のお兄さんはお父さんに似ているね」と言えるだろうか。<sup>166)</sup>

確かに我々が或るものを見て「似ている」とか「似ていない」と言えるのは、そのように判断する基準を既に知っているからであろう。<sup>167)</sup>すると懐疑主義者も含めて人間の心の中には実は何らかの範型が秘められていて、それがあからこそ我々は「似ている」とか「似ていない」とか言えることになる。カッシキアクムでのこの発見は、思索が進むにつれて次第に「心の中に真理の光がある」とする発想になってゆく。

「……もろもろの学問のうちの最も確実な学問でも精神の眼に見られるようになるためには、大地やその他地上の一切のものがそうであるように、太陽によって照らされなければならない。しかるに照らすものはまさしく神ご自身なのである」<sup>168)</sup>

ちょうど肉体の眼が暗闇では何も見えることができないように、精神の眼も霊的光がなければ認識できないというわけである。これは既に見た照明説である。さらに 389 年に故郷のタガステで書かれたと推定される『教師』ではこうある。

「我々が精神 *mens* によって認識する対象、すなわ



ち知性 *intellectus* や理性 *ratio* によって認識する対象に関して論議するときには、我々は、いわゆる「内なる人」が照らされ享受するところの真理のあの内的な光の中で我々が直接に見ている対象について語るのである。……だから、私が真理を語り、彼が真理を認識するときでさえ、教えるのは私ではないのである。彼は私の言葉によって教えられるのではなく、神によって彼の内奥に啓示されることによって明らかにされるもの自身から教えられるのである」<sup>169)</sup>

人間の心の底にある真理の内的な光は同書ではまたキリストともされている。

「我々が知解することのできる普遍的なものについては、我々はおそらく言葉によって真理と相談するように促されるのであるけれども、我々は外に響くところのその言葉に相談するのではなく、内奥にあって精神そのものを支配する真理に相談するのである。しかしながら、教えるのは、相談されるところの人、内的人間に住むと言われるキリスト、すなわち不変の神の力、永遠の知恵なのである……」<sup>170)</sup>

思い出してほしい。カッシキアムでは真理はこの世界を超えた英知界に、つまり真理を探究している者の外にあった。ところが今や真理は人間の内側にあると言うのである。当然そうすると真理探求のベクトルはこの感覚の世界を超えた彼方へではなく、自分の魂の内奥へと変わってくる。いきおい彼の言うところは神秘色を帯びることになる。その例として『教師』に次いで 390 年頃に書かれた『真の宗教』の有名な一節を挙げよう。

「外に出て行くな。あなた自身の中に帰れ。真理は内的人間に住んでいる。そして、あなたの本性が可変的であることを見出すなら、あなた自身をも超えなさい」<sup>171)</sup>

もう一つ『告白』からも挙げよう。386 年に新プラトン派の書物を読んで自分の内面を見つめなおす件である。

「私は内面に入って行き、何かしら私の魂の目のようなもので、私の魂の目そのものを越えて、不変の光を見ました」<sup>172)</sup>

このような「外から内へ」さらに「内なる超越」に通じる主張はプロチノスにもあった。彼もまた靈魂が一者と合一する過程として (1) 外から内への靈魂の浄化、(2) それによる感性界から知性界への上昇、(3) 知性界での照明、を語っていた。ただしプロチノ

スの場合、最終的に靈魂は一者と合一するのであるが、アウグスチヌスでは至福への期待が語られるばかりでプロチノスのようなエクスタシスの記述は見られない。すると、どうやらアウグスチヌスはプロチノスのような神との合一は達成できなかったと推測できよう。そうすると人間が絶対確実な知識を獲得するのは不可能なことに次第にアウグスチヌスも気づかざるを得なくなっていくのではないだろうか。というのは我々を至福へと導くとされる道はいっしょか「真の哲学」ではなくなっているからである。

「およそ善にして至福な生にいたるすべての道は、真の宗教において確立される。そして真の宗教においては唯一の神が礼拝され、また、その真の宗教においては、それによって宇宙が創始され、完成され、維持されるところのあらゆる存在の根源が、最も清い宗教的敬虔をもって、認識されるのである」<sup>173)</sup>

至福をもたらすのは今や「真の宗教」なのである。だが、この「真の宗教」を以てしても真理である神が完全に認識されるわけではない。なるほど確かに彼は次のようなことを述べてはいる。

——「真の宗教」が信じられると、あらゆる被造物が神の三位一体により存在し支配されていることが分かるようになる。<sup>174)</sup>

だが、そのあとこう続いている。

「そのことが認識されると、人間の理解し得る限りにおいてではあるが、万物がいかに必然的な、破られ難い正しい法則によって、彼らの主なる神に服従さしめられているかが、十分に明らかになることであろう。ここから、はじめに我々が権威に従うことによってのみ信じたことが、次のような仕方では知られ得るのである。すなわち、一部は、それが最も確実であるものを知る仕方、また一部は、それが起こるのであるということ、あるいは当然起こらなければならないということを知る仕方、知られるのである。……なぜなら、かの神聖な受肉、処女からの誕生、我々のための御子の死、死からの甦り、天にあげられ父の右に座したもうたこと、罪の根絶、審判の日、体の甦りは、三位一体の永遠性と被造物の可変性が認識されることによって、信ぜられるのみならず、そのことは人類に示された最高の神の憐れみに属するものであることがわかるのである」<sup>175)</sup>

神の子イエスの誕生から復活に至るまで「最高の神の憐れみ」*summi dei misericordia*により認識できるようになると言っても、それはあくまで「人間の理解し得る限り」*quantum homo assequi potest*という制限つきなのだ。これでは先に見たユスティノスで言えば、あるがままの模倣ではなく、不正確な模写に留まっていることになろう。しかも、なるほど一部は極めて確実に認識されとしても、それ以外は「起こるであろう」*fieri posse*という可能や「起こらなければならない」*fieri oportuisse*という断定であるから、しょせん蓋然的知識に留まるわけである。するとキリストの權威を認め、神の憐れみを与えられたとしても、我々の認識は蓋然性を脱することはできないと考えられよう。

思えばカッシキアム期に属する『ソリロキア』では「神への直観こそが、真に完全なすぐれた能力であり、自己の終極に到達した理性であり、至福な生がこれに続く」<sup>176)</sup>と言われ、この世において神を認識することが可能と考えられていた節があったが、それから僅か三、四年で、至福への期待は大幅に後退していることが窺える。神から憐れみが下され、人間の心の中に真理が潜んでいるとしても、その真理である神を完全には認識できそうもないのである。カッシキアムでの予想は甘かったと言うしかない。こうなると至福つまり神の完全な認識はあの世に期待するしかなくなる。

「……すべての宗教は魂のために存在する。なぜなら肉体の性質は、それが如何にもあれ、特に死後、その魂が至福の状態にあるための条件を備えている人には、何ら心配や不安の理由にならないからである。従って、もし真の宗教があるとすれば、それはただ魂のためにのみ、あるいは特に魂のために、創始されたのである。しかるにその魂は……知恵を獲得するまでは、誤りを犯し、かつ愚かである。……そしてそのような知恵こそおそらく真の宗教なのである」<sup>177)</sup>

ここでは「死後において魂が至福の条件を備えているような人なら、肉体のことなど気にかけない」と言われているわけだから、逆に言えば、魂の至福つまり神の完全な認識はあくまで死後の世界におけることになろう。

かくして最高の幸福が現世から死後に移され、真理の認識のためにはまず信じることが強調されるとなると、現世に生きる我々にとって一番大事なことは信仰ということになろう。すると痛感されるのは、

神を信じなければならぬと分かっている、それを決断できない己の心の弱さである。『告白』ではかつての自分の状態についてこう語っている。

「ひたすらあなたを崇め、あなたを享受することを欲する新しい意志が私の中に生じ始めていましたが、この意志には年月を経て凝り固まった従前の意志を克服する力はまだありませんでした。こうして私の内には二つの意志が、一つは古く、一つは新しく、一方は肉的で、他方は霊的な、二つの意志が互いに争い、その抗争により私の魂を引き裂いてしまいました」<sup>178)</sup>

すなわち意志の分裂である。自分の心であるにもかかわらず、また具体的にどうすればいいのか分かっているにもかかわらず、なかなかそれを実行できない。こうした魂の不可解な現実の原因として、人祖アダムとエバの原罪 *peccatum originale* が挙げられ、そのために完全に意志することが出来なくなった魂の病 *aegritudo animi* が嘆かれることになる。<sup>179)</sup>すると、ここからさらに自由意志 *liberum arbitrium* つまり魂の自由選択が問題となり、その解決のために、原罪に歪められて正しい選択ができなくなった魂の救済として再び神の恩寵が問題になるわけである。そうすると、その恩寵が下される通路として教会への帰依が説かれることになり、最終的にキリストを頂点に掲げるカトリック教会こそ神に選ばれた人々の社会だとする神国論へと思想が展開されていくことになる。

これらはいずれも、聖書の記述をすべて真とする前提で説明されるわけだから、純粋に理性だけで論理を組み立ててゆく「哲学」とはもはや呼べない。すなわち神学 *theologia* である。こうして、現世における完全な認識の不可能性に行き当たったアウグスチヌスはそれでもなお真理の可能性を模索していくうちに、いつしか彼が批判するマニ教と同じ憶測に陥ってしまったのである。

## 結論

先にも述べたようにアウグスチヌスの時代には、この世界を創造した造物主の存在は多くの哲学者の認めるところとなっていた。

—— 真理とは絶対確実な知識である。

—— 絶対確実な知識とは永遠不変な存在を認識することである。

—— だが、この世界に永遠なものは何一つとして

ない。すると永遠不変な存在はこの世界を超えた彼方に求めるしかない。

しかし、この世界を超えている存在は、この世界を超えているのだから、この世界にある人間に認識できるわけがない。この当然の理屈に素直に従ったのが懐疑派である。

これに対し、この論理的矛盾を神秘的直観つまり真理の直接体験ということで乗り越えようとしたのが新プラトン主義だった。だが、それはプロチノスのように優れた資質を持つ者だけに可能な狭い道である。それに仮に体験できたとしても、その体験が本物かどうか確認できない。「一度でも体験すれば分かるが、体験するまでは絶対に分からないような体験」では真理としての説得力に欠ける。なぜなら真理とはいっても、どこでも、誰にでも確実に受け入れられる知識のはずだからである。

となると万人に真理の認識を可能とする残された道は「この世界を超えた存在を、我々自身は能力的には不足しているにもかかわらず、最終的に認識できる」という論理を編み出すしかない。そのためには我々の能力の不足を補うものが必要になるが、それは、論理的に考えれば、世界を超えた存在以外にあり得ない。

「(383 年に)私はイタリアに着いて自問自答しながら熟考してみたが、その時の問題は……どうすれば真のものが発見されるかということであった。……しかるにしばしば私には、真実は発見できないものと思われ、私の思索の大波はアカデミア派の主張に同調する方向へ吹き寄せられて行った。私は、自分のできる限りにおいて、如何に人間の精神がこのように活発で、賢く、かつ洞察力があるかということについて、しばしば繰り返し考察しているうちに、真理というものは、その探求の方法が真理そのものの中に隠されてはいるが、真理それ自体としては決して隠れているものではないこと、また真理探究の方法はある宗教的権威から受け取るべきだということを考えるようになった。ただ各人がそれぞれ自分こそその宗教的権威を与えるものと主張して互いに争っていたので、その宗教的権威が何であるかという問題が残っていたのである」<sup>180)</sup>

つまり真理の認識を可能にするためには単に「世界を超えた存在」を権威とするだけでは不十分なのである。そうした存在はまた自らを我々に開示して

くれるような存在でなければならない。すると求められるべき宗教的権威とはアリストテレスが想定した「不動の動者」のような哲学の神ではない。我々が真剣に願えば、必ず真理の光で我々を照らしてくれる、まさに恵みの神でなければならないのだ。哲学からのこうした切実な要請に、イエスを地上に降りた神と説くキリスト教は合致していたのである。

「言葉は肉となり私たちのあいだに宿られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であり、恵みと真理とに満ちていた」<sup>181)</sup>

「知恵と知識の宝はすべて、キリストの内に隠れています」<sup>182)</sup>

「私たちは神の御子が来て、真の神を知るようにと私たちに知性を与えて下さったことを知っている。また、この真なる方の真の御子イエス・キリストの内にあることを知っている。この方は真の神であり、永遠の生命である」<sup>183)</sup>

「あなた方のなかで知恵の欠けている人がいれば、誰にでも惜しみなく咎めだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます」<sup>184)</sup>

聖書のこれらの言葉は懐疑と憶測の谷間を揺れ動きながら、それでもなお真理の糸口を模索する者には一縷の望みだったであろう。だから多くの哲学者たちが次第にキリスト教を受け入れていった。<sup>185)</sup> アウグスチヌスもまたそうした一人だったわけである。『告白』において彼は、聖書が神の霊による書物であることを信じるべきであるとして言う。

「……私たちは単なる理性によって真理を見出すためには十分な力を備えてはおらず、それゆえ聖書の権威による道が必要となるわけですが、もしあなたが聖書によって信じられ、また聖書によってあなたご自身が探求されることを望まれていなかったならば、すでにあらゆる地にゆきわたっているこのような優れた権威を聖書に付与されることは決してなかっただろう、とようやく信じ始めました」<sup>186)</sup>

まことにアウグスチヌスは人間の能力の不足を実感したからこそ、真理の光で我々を照明する恵みの神を信じざるを得なかったのである。この意味で彼が哲学からキリスト教へ回心した理由はユスティヌスと同じだった。神は神でも、単なる霊的存在ではなく恵みの神でなければ、真理の探究は行き詰ってしまうのである。懐疑の袋小路から抜け出すためには、真理の光を保障してくれる神をまず信じる

しかない。それゆえアウグスチヌスは信徒たちに訴えている。

「あなたが信じていないなら信じなさい。なぜなら理解は信仰の報いであるから。それゆえ、あなたは信じるために理解しようとしてはいけない。あなたは理解するために信じなさい」<sup>187)</sup>

**理解するために信じる。**まことにこの信仰は真理の探究を可能にするための信仰であり、言うなれば方法的信仰である。そして信仰を前提にしている以上、それに基づく知識はもはや哲学ではなく神学なのである。

筆者に言わせれば、絶対確実な知識を求めた古代の人々が人間の知識の蓋然性を嘆き、自然の世界を超えた彼方に真理を求めたその気持ちは理解できる。しかし、そうやって自然界の向こうに世界を創造した神を想定したところで、それこそ蓋然的存在ではないか。なるほど感覚は間違うこともあるから蓋然的知識しかもたらさない。だが感覚すらも不可能な、ただ信じるしかないようなものは、その蓋然的知識すら与えてくれないのである。となれば少しでもましな方に、つまり自然界からもたらされる蓋然的な知識だけに関心を限定した方がまだ論理的に一貫しているのではないだろうか。

これについて予想されるアウグスチヌスの反論。

—— 蓋然的知識に甘んじると君は言うが、アリストテレスが言っているように、人間は知ることを、それもより根源的に知ることを望む動物なんだから、そんな曖昧な知識に甘んじることが人間として不幸なことだ。

—— でも先生。いま申しましたが、信じるしかないような存在こそ曖昧じゃありませんか。曖昧な存在からは曖昧な知識しか得られないと思います。

—— だから何回も言ってるだろう、神の存在だけは絶対確実だと信じ込むんだよ。

—— でも先生、その神が我々に恵みを与えてくれるという保証はどこにもありませんよ。

—— そんなことはないよ。聖書にそう書いてあるし、聖書が信じられないなら、自然を観察してごらん。この世界は人間のために実にうまく出来ているじゃないか。これこそ神が恵み深い証拠だよ。

—— でも先生、詐欺師はみんな善人を装っているように、聖書の神というのも実は人類を搾取しようとしている悪い宇宙人か何かで、我々

を信用させるために慈悲深いふりをしているのかもしれないよ。

—— だから信じるんだよ。聖書の神は本質的に恵みの神なんだと。

—— でも先生、いくら聖書ではそうだと言っても、理性の限界を超えたものを持ち出したら、もはや哲学になりませんよ。

—— それなら、それでいいじゃないか。それに確か君はこの論文の一章の終わりで、懷疑主義は「探求を続ける」と言いながら実は真剣には探求していないと言ったよね。判断留保は哲学の挫折で、そこに心の平穏を見出すことは哲学の終焉だと言ったよね。ということは君は哲学を続けたいわけだろう。

—— はい。続けたいです。

—— それなら、この堂々巡りを終わらせるしかないよね。すると蓋然的かもしれないが、恵みの神が存在するのは絶対確実と最初に前提するしかないじゃないか。懷疑主義を乗り越えて哲学したいなら、もはや信仰を土台にした哲学に移るしかないんだよ。だから君も早く神学者になりなさい。『告白』の出だしで書いたけど、<sup>188)</sup>人間の心は神のうちに憩うまでは安らぎを得られないんだよ。

かくして古代も末期になると哲学者たちは知識の蓋然性を論うその一方で、「恵みの神」というそれ以上に曖昧な、それこそ蓋然性の最たるものを「真理」として前提にするようになっていった。これにより確実な知識の探究は哲学から神学へと装いを変え、これ以降千年にも及ぶ中世思想が始まるのである。

## 脚 注

[1] 『ギリシア哲学者列伝』下巻 p.151

[2] 「他方、デモクリトスは、ある時には諸感覚に現われるものを否認し、そしてこれらのうちの何ものも真理に従って現われているわけではなく、ただ思いなしに従って現われているにすぎないのであり、諸々のあるもののうちで真なることとして存立するのは、諸原子と空虚が存在するということである、と言っている。すなわち彼は言う。『甘さといい、苦さといい、熱さといい、冷たさといい、すべては慣わし(ノモス)の上のことにすぎず、まことには諸原子と空虚のみ』この言葉の意味するところは、諸々の感覚対象は存在するとみなされ、またそう思いなされているけれども、しかし真理に従えば、それらは存在するものではなく、ただ諸原子と空虚だけが存在している、ということである」セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第7巻135節 pp.65-66

[3] 「……彼は二つの知があると言っている。その一つは諸

感覚を通しての知, もう一つは思考を通しての知であり, これらのうちで思考を通しての知を彼は「真正の」知と呼び, 真理の判断に関して信用できるものであるという証言をそのためにに行っているが, 他方, 諸感覚を通しての知の方は「暗い」知と呼び, 真実の識別に関して誤りがないという性格をそれから剥奪している」セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第7巻 138節 p.68

- [4] 『ギリシア哲学者列伝』下巻 p.156  
 [5] 『ギリシア哲学者列伝』下巻 pp.151-152  
 [6] Praeparatio evangelica.18 巻 14 章 2-4 節 Sources Chretiennes, No.338, pp.147-149  
 [7] 『ギリシア哲学者列伝』下巻 p.152  
 [8] 『ギリシア哲学者列伝』下巻 p.153  
 [9] キケロ『弁論家について』第3巻 67節  
 [10] キケロ『アカデミカ後書』1巻 12 章 45 節 [http://hil.flet.mita.keio.ac.jp/person/nakagawa/acpost\\_i.html](http://hil.flet.mita.keio.ac.jp/person/nakagawa/acpost_i.html) (2014年7月31日確認)  
 [11] 『ギリシア哲学者列伝』上巻 pp.360-361。もっとも前1世紀のキケロによれば, アルケシラオスが懐疑主義者となったのはストア哲学に対抗するためだったらしい。前掲の中川純夫訳『アカデミカ後書』1巻 12 章 44 節  
 [12] エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』1巻 1 章 1-3 節 p.6  
 [13] エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』1巻 14 章 140 節 p.68  
 [14] エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』1巻 12 章 28 節 p.21  
 [15] アリストテレス『形而上学』980a21  
 [16] ポルピュリオス『プロチノス伝』3 節 以下に邦訳の『プロティノス全集』での該当箇所をしめす。第1巻 p.101  
 [17] ポルピュリオス『プロチノス伝』20 節 第1巻 p.132  
 [18] ポルピュリオス『プロチノス伝』23 節 第1巻 p.139  
 [19] プロチノス『エンネアデス』第3巻第8論文(『自然, 観照, 一者について』)10 節 第2巻 pp.451-452  
 [20] 第1巻第7論文(『第一の善とその他の善について』)1 節 第1巻 p.303  
 [21] 第3巻第8論文 10 節「ではいったい一者とは何だろうか。それは万有を生み出す力であって, この力がなければ万有はないし, 知性も第一の普遍的生命とはなり得ないのである」第2巻 p.450  
 [22] 第6巻第9論文 6 節「それには知性の働きとしての直知ノエーシスというものはない。……また一般の働きというものが既にそれにはない。すなわちそれは作用以前のものであり, また従って知性の作用たる直知以前のものだからである。つまり何をいったいそれは直知すべきであろう。むろん自己自身を直知するのだからではない」第4巻 p.581  
 [23] 第5巻第1論文(『三つの原理的なものについて』)第3巻 p.376  
 [24] 第5巻第1論文 6 節 第3巻 p.376  
 [25] 第5巻第1論文 6 節 第3巻 pp.376-377  
 [26] 第5巻第1論文 7 節「しかし, もっと明確に言うておく必要があるから言うのであるが, 知性はかのものの肖像なのである。まず第一, 生まれたものは何らかの意味において, かのものなのであり, かのものの多くの特徴を保有し, かのものに対しては, ちょうどまた陽光の太陽に対するがごとき, 同類性がなければならないからである」第3巻 p.378  
 [27] 第5巻第1論文 7 節「……かのものの側からも知性は, そのような力のいわば自覚の如きものをもらって既に持っているのである。すなわち自分自身で存在を生むことができるという自覚であり, その有りようを, かのものから受けた力によって, 自分のために限定することが

できるという自覚である」第3巻 p.378

- [28] 第5巻第1論文 7 節 第3巻 p.380  
 [29] 第6巻第9論文 5 節「……知性は魂の上に君臨していて, 魂の父とも仰がれる知性界であることが見られるから, 人は知性をもって揺らぐことのない静かな運動となし, 自己のうちに万有を含み, 既に万有であるものとして, それは不可分の多であるとともに, また逆に分別の明らかな多であることを認めなければならない。……このひとまとめにされた多がすなわちすなわち直知される世界(知性界)なのであって, それは第一者に次ぐものである。そして理論上その存在は, もし人が魂の存在をも認めるとするならば, 必然的にそれも認めなければならないようなものである」第4巻 p.576  
 [30] 第4巻第7論文(『魂の不死について』)13 節「およそ純粋な知性としてあるものは, 知性界で情念にとらわれることなく, ただ知性的な生のみを所有し, かしこにいつまでも留まっているのであるが——というのは知性には衝動も情念もないからである——かの知性に続くもので, 欲求を加え持つものは, 欲求が付け加えられることによって, いわばはるか下方の世界(としての感性界)へと進んで行って, 知性界で見たものに従って(感性界を)秩序づけようとし, いわば知性界の諸真実在によって孕める者となって生みの苦しみにとらわれ, 制作し創造しようと熱望するのである。そしてその魂はこの熱望ゆえに感性界に達することになったのであって……」第3巻 p.313  
 [31] 第3巻第8論文 5 節 第2巻 p.433  
 [32] 第4巻第3論文 15 節 第3巻 p.78  
 [33] 第4巻第3論文 17 節「……もし天界が感性的な場のうちでは(他)より優れているのであれば, その場は知性界の末端に境を接していることになるであろう。だから, まずその領域にある諸物体(すなわち諸天体)が知性界から靈魂を与えられ, 『与るのにより適したもの』として靈魂に与ることになるのである。だが, これに対して, 土の性から成るものは最下位のものであり, もともと靈魂に与ることの少ないものであって, 非物体的なものから遠く離れているのである。(従って靈魂たちは知性界から天界に降りてきて, まず諸天体に宿ることになるのである)」第3巻 p.82  
 [34] 第3巻第8論文 4 節 第2巻 p.431  
 [35] 第3巻第8論文 2 節 第2巻 p.425  
 [36] 第6巻第9論文 7 節「質料については, それがあらゆる事物の印影を受容すべきものだとする, またあらゆる事物の性質を欠いていなければならないということが言われているが……」第4巻 p.583  
 [37] 第1巻第8論文 10 節 第1巻 pp.336-337  
 [38] 第3巻第2論文(『神のはからいについて』)5 節 第2巻 p.195  
 [39] 第4巻第6論文(『感覚と記憶について』)3 節 第3巻 p.265  
 [40] 別の三分法もある。例えば第6巻第1論文 12 節には「靈魂の『欲求を司る部分に属するもの』と『激情を司る部分に属するもの』と『分別を司る部分に属するもの』とに分ければよい」とある。第4巻 p.64  
 [41] 第2巻第9論文(『グノーシス派に対して』)2 節 第2巻 pp.106-107  
 [42] 第5巻第1論文 7 節「ところで知性から生まれたもので, 一種の言論的表現であり, また一つの存在として成立しているものに, 靈魂の知性的な部分がある。これは知性を中心に運動して, どこまでも知性に依存するような, 知性の光彩であり, また跡形なのである。すなわち一面においてそれは, 知性と一つに結合されて, そのために知性に満たされ, 知性を楽しみ, 知性の仲間入りをして, 直知作用を営む……」第3巻 p.382

- [43] 第2巻第9論文17節「この世界の美しいものは、かの世界のものに次いで美しいのである」第2巻 p.145
- [44] 第3巻第5論文(『エロスについて』)1節 第2巻 pp.279-280
- [45] 第5巻第9論文(『知性とイデアと有について』)1節 第3巻 pp.561-562
- [46] 第5巻第9論文4節「なぜ(我々は)靈魂を超えて昇らねばならないのか。なぜ靈魂を第一位のものとして立ててはいけないのか。それは第一に、知性が靈魂とは異なるものであり、より優れたものであり、そして、より優れたものが本性上より先のものであるからだ」第3巻 p.566
- [47] 第4巻第8論文(『魂の肉体への降下について』)4節 第3巻 p.331
- [48] 第3巻第6論文(『非物理的なものの非受動性について』)5節 第2巻 p.325
- [49] 第3巻第6論文5節 第2巻 pp.324-325
- [50] 第3巻第6論文6節「……感覚のなすことは眠っている靈魂のなすことだからである。つまり靈魂の肉体に内在する部分はすべて眠っているのである。それで靈魂の本当の目覚めとは本当に肉体から起き上がることであり、肉体を伴って起き上がることではないのである。なぜなら肉体を伴って起き上がることは一つの眠りから別の眠りへの移行にすぎず、それは例えば一つの寝床から別の寝床へと移るようなものだからである。これに対して本当に起き上がることは肉体から完全に離れて起き上がることであり、……」第2巻 p.330
- [51] 第1巻第6論文6節 第1巻 p.291
- [52] 第3巻第6論文5節 第2巻 pp.324-325
- [53] 第5巻第3論文(『認識する諸存在とその彼方のものについて』)8節 第3巻 pp.423-424
- [54] 第6巻第9論文7節 第4巻 pp.583-584
- [55] 第1巻第6論文7節 第1巻 p.292
- [56] 第6巻第7論文(『いかにしてイデアの群が成立したか。および善者について』)22節 第4巻 p.452
- [57] 第6巻第9論文3節「……我々の求めているものは一なるものであって、我々が考察しているのは、万物の始めをなすところの善であり、第一者なのであるから、万物の末梢に墮して、その根底にあるものから遠ざかるようなことがあってはならない」第4巻 p.570
- [58] 第6巻第8論文8節 第4巻 pp.524-525
- [59] 第6巻第7論文41節 第4巻 p.500
- [60] 第6巻第9論文4節 第4巻 p.573
- [61] 第6巻第7論文36節 第4巻 p.486
- [62] 第3巻第8論文8節 第4巻 p.441
- [63] 第6巻第9論文11節 第4巻 p.595
- [64] 第6巻第9論文9節 第4巻 p.592
- [65] ポルピュリオス『プロチノス伝』23節 第1巻 p.139
- [66] ポルピュリオス『プロチノス伝』1節 第1巻 p.96
- [67] 第3巻第4論文2節 第2巻 p.258
- [68] 第3巻第4論文3節にらびに6節 第2巻 pp.261-261 また pp.267-268
- [69] 第4巻第8論文1節 第3巻 p.322
- [70] ポルピュリオス『プロチノス伝』2節 第1巻 p.98
- [71] 第6巻第9論文5節 第4巻 p.575
- [72] この萌芽はプラトンにある。『国家』第六巻の線分の比喻では 511C において、悟性的思考(間接知)と知性的思惟(直接知)の区別が語られ、また続く第七巻の洞窟の比喻では 518C において、真理を知る能力と器官が人間には生まれながら具わっていると説かれている。
- [73] 第1巻第6論文8節 第1巻 pp.295-296
- [74] 『ギリシア哲学者列伝』中巻 p.26
- [75] プラトン『国家』第六巻には照明説の萌芽がある。507D-E では「『目の中にちゃんと視覚があり、それを

- 持つ者が視覚を用いようと努めても、そして見られる物には色取りが現にあるとしても、しかし本来まさにこの目的のために特別にあるところの第三の種族のものがそこに現在しなければ、君も知っているように、視覚は何ものも見ないだろうし、様々の色取りも見られないままにいてだろう』『その特別のものと言われるのは、いったいなんのでしょうか?』と彼は言った。『君が光と呼んでいるものだ』と僕は言った」とある。また同巻 508C では「思惟によって知られる世界において『善』が『知るもの』と『知られるもの』に対して持つ関係は、見られる世界において太陽が『見るもの』と『見られるもの』に対してもつ関係とちょうど同じなのだ」とある。
- [76] 『神々の本性について』 pp.17-18 ならびに pp.39-40
- [77] 『神々の本性について』 p.84
- [78] 『神々の本性について』 p.270
- [79] 『神々の本性について』 p.90
- [80] 『神々の本性について』 p.90 「神々の性格なるものは、我々(人間)の問題からは遠く離れて独立し、完全なる平和のうちに、不死の生命を持っているものでなければならぬからである。すなわち一切の苦痛もなければ、危険もなく、それ自身の力を以て力強く、我々を全く必要とせず、功勞に左右され(て恩寵を垂れる)こともなく、また怒りにも動かされないものだからである」
- [81] ルクレチウス『物の本質について』 p.17 「自然のまず第一の原理は、次の点から我々は始めることとしよう。すなわち何ものも神的な力によって無から生ずることは絶対にない、という点である」また pp.107-108 では「……この世界は自然によって造られたもので、原子が自ら偶然の衝突によって、あらゆる具合に、偶然に、目的もなく、意志もなく、結合され、遂に突然投げ出されて出て来たものが、大きな物すなわち大地だとか海とか天空とか生物の種類とかを発生せしめたのである……」とある。
- [82] 『神々の本性について』 pp.98-99
- [83] 386 年に執筆された『アカデミア派論駁』の第3巻 19 章では「こういうわけで今日、私たちはキュニコス派かペリパトス派かプラトン派以外にはまったく哲学者をみないものである」とある。キュニコス派とはストア派のことである。
- [84] 『イザヤ書』45 章 5 節
- [85] 『創世記』1 章 31 節
- [86] 『知恵の書』11 章 24-26 節
- [87] 『詩篇』145 章 8-9 節
- [88] 『イザヤ書』45 章 17 節
- [89] 『イザヤ書』46 章 13 節
- [90] 『イザヤ書』56 章 1 節
- [91] 『マラキ書』3 章 1 節
- [92] 『ユダヤ古代誌』18 巻 3 章 3 節。参考までに同書 20 巻 9 章 1 節には「大祭司アンナスは裁判のため長老たちを集め、その前に、キリストと呼ばれるイエスの兄ヤコブを他の数人とともに立たせ、彼らに石打ち刑を宣告させた」という興味深い記述もある。
- [93] 『ローマ皇帝伝』第5巻 25 節 岩波文庫 下巻 p.110
- [94] 『ローマ皇帝伝』第6巻 16 節 岩波文庫 下巻 p.150
- [95] 『プリニウス書簡集』□, 96, 9
- [96] 『マタイ福音書』20 章 20-28 節ならびに『マルコ福音書』10 章 35-45 節
- [97] 『マタイ福音書』26 章 56 節「このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」
- [98] 『使徒行伝』17 章 32 節
- [99] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』2 章 5-6 節 p.202
- [100] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3 章 3 節 p.204
- [101] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3 章 4 節 p.204
- [102] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3 章 4 節 p.204
- [103] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3 章 5 節 p.204

- [104] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3章5節 p.204  
 [105] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3章5-7節 p.205  
 [106] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』3章7節 p.205  
 [107] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』4章1節 p.206  
 [108] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』4章7節から5章3節 pp. 208-210  
 [109] その典型としては『パイドン』があげられる。  
 [110] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』7章1節 p.212  
 [111] 『ユダヤ人トリュフォンとの対話』8章1節 p.213  
 [112] 『ヨハネ福音書』1章1-3節  
 [113] 『アントニヌスに宛てたキリスト教徒のための弁明』5-4, p.21  
 [114] 『アントニヌスに宛てたキリスト教徒のための弁明』46-2, p.62  
 [115] 『アントニヌスに宛てたキリスト教徒のための弁明』28-3, p.44  
 [116] 『ローマ人元老院に宛てたキリスト教徒のための弁明』8-1, p.149  
 [117] 『ローマ人元老院に宛てたキリスト教徒のための弁明』10-2, 3, p.151「いつの時代にも愛知者や立法家たちが語り、見出してきた良質なものがありますが、これはすべてロゴスの部分による発見と観照を通じてえられた努力の結果なのです。しかし彼らはロゴスについての全体すなわちキリストの知識を得ていなかったのです、その言葉はしばしば自己矛盾に陥ることもあったのです」  
 [118] 『ローマ人元老院に宛てたキリスト教徒のための弁明』13-5, p.156  
 [119] 『ローマ人元老院に宛てたキリスト教徒のための弁明』13-6, p.156  
 [120] 『告白』第3巻4章 pp.130-131  
 [121] 『告白』第3巻4章 p.132  
 [122] 『告白』第3巻7章 pp.140-141  
 [123] 『告白』第7巻1章 pp.314-315  
 [124] 『告白』第7巻1章 pp.314-315  
 [125] 『告白』第7巻5章 pp.325-327  
 [126] 『告白』第5巻10章 p.252  
 [127] 『告白』第5巻10章 p.252  
 [128] 『告白』第5巻3章 pp.228-230「……(哲学者たちは)被造物については多くの真正なことを語りながら、被造物の作者である真理そのものを敬虔に探求しようとしなため、見出すことができません」  
 [129] 『告白』第3巻4章 p.132「……この御名を欠くものは、学問的なものであれ、洗練されたものであれ、実話であれ、どんなものであれ、私のすべてを捉えることはありませんでした」  
 [130] 『告白』第5巻10章 p.251  
 [131] 『告白』第5巻10章 p.251  
 [132] 『アカデミア派論駁』2巻9章 p.76「……アカデミア派は私の心に、人は真なるものを見出すことができないという蓋然性の概念を持ち込んだ。それを受けて私は怠惰となり、まったく無為の状態となった」  
 [133] 『告白』第5巻13章 p.256  
 [134] 『告白』第5巻14章 p.258「こうして私は一般に考えられているようなアカデミア派の方法に従い、すべてのものを疑い、すべてのものの間を揺れ動きながらも、マニ教徒からは離れるべきだ、と心に決めました。それは、このような懐疑の時にありながらも、マニ教にはもはや哲学者たちに優るものは何もない、と判断しているゆえに、そのような宗派に留まり続けるべきではないと考えたからです。それにもかかわらず、私は哲学者たちに私の病める魂の治療を委ねることははっきりと拒んでいました。彼らはキリストという救いをもたらす方の名前とは縁がなかったからです」  
 [135] 『アカデミア派論駁』第2巻2章4節 p.52-53

- [136] 『告白』第7巻9章 p.344 この「プラトン派の書物」が具体的にはいかなるものであったか不明だが、プロチノスの一部と恐らく弟子のボルピュリオスの著作を含んでいたらしい。訳者のビクトリヌスはキリスト教に改宗した人物。  
 [137] 『告白』第7巻9章 p.347  
 [138] 『告白』第7巻4章 p.324  
 [139] 『告白』第7巻12章 p.356  
 [140] 『告白』第7巻12章 p.358  
 [141] 『アカデミア派論駁』2巻2章5節 p.54  
 [142] 『告白』第7巻21章 p.369  
 [143] 『告白』第7巻9章 pp.344-346  
 [144] 『告白』第8巻5章 p.400  
 [145] 『アカデミア派論駁』1巻2章5節 p.19  
 [146] 『至福の生』2章11節 pp.176-178  
 [147] 『ソリロキア』1巻1章5節 p.337  
 [148] 『アカデミア派論駁』1巻1章3節 p.17  
 [149] 『アカデミア派論駁』3巻18章41節 p.149「……哲学のうちで最も純化され最も光に満ちたあのプラトンの教えが、誤謬という雲を破ってその輝く顔を現したのは特にプロチノスにおいてであった。……このプロチノスはプラトン派の哲学者で、人々が自分たちはプラトンと同じ時代に生きていると思うほど、プラトンとよく似ているとみなされた。しかし時代の差がある限り、むしろプラトンがプロチノスに再び生まれ変わったと考えるべきだろう」ちなみにプラトン哲学と区別して新プラトン主義という概念が示されるようになったのはようやく18世紀末である。それまでは新プラトン主義は「アレクサンドリア派」と呼ばれていた。  
 [150] 『至福の生』1章1節 p.163  
 [151] 『秩序』2巻9章26節 pp.288-289  
 [152] 『秩序』2巻9章26節 p.289  
 [153] 『秩序』2巻9章26節 p.289  
 [154] 『秩序』2巻9章26節 p.289「時間的には権威が、事態的には理性が先行する。行為において尊重されるものと、欲求においてより高くみられるものとは別であるからだ」  
 [155] 『アカデミア派論駁』3巻20章43節 pp.151-152  
 [156] 『秩序』1巻9章27節 p.242  
 [157] 『秩序』2巻5章17節 pp.275-276  
 [158] 『信の効用』1-2 p.16  
 [159] 『アカデミア派論駁』3巻19章42節 pp.150-151  
 [160] 『アカデミア派論駁』3巻3章5節 p.94  
 [161] 『アカデミア派論駁』3巻20章43節 p.152  
 [162] 『ソリロキア』1巻2章7節 p.340  
 [163] 『ソリロキア』1巻2章7節 p.340  
 [164] 『アカデミア派論駁』3巻1章1節 p.88  
 [165] 『アカデミア派論駁』2巻7章19節 p.71  
 [166] 『アカデミア派論駁』2巻7章16節 p.67  
 [167] 『アカデミア派論駁』3巻18章40節 pp.147-148「思うに、その範型を注視している人はすべてまた似像を正しく認めるのである。もし真なるもの自体が何であるか知らないならば、知者であっても、いったいどのようにして真なるものに似ているものを認めるのであろう。あるいはまた、どのようにして似真性に従って行為するのであろうか。それゆえアカデミア派の人々は、虚偽なるものを知っており、また是認しているのだ。そしてその虚偽なるものの中に、彼らは真なるものとの賞賛すべき相似を注視しているのだ」  
 [168] 『ソリロキア』1巻6章12節 p.350  
 [169] 『教師』12-40 pp.268-269  
 [170] 『教師』11-38 p.266  
 [171] 『真の宗教』39-72 pp.359-360  
 [172] 『告白』7巻10章16節 pp.349-350

- [173] 『真の宗教』 1-1 p.287  
[174] 『真の宗教』 7-13 p.301  
[175] 『真の宗教』 8-14 p.302  
[176] 『ソリロキア』 1 巻 6 章 13 節 p.352  
[177] 『信の効用』 7-14 p.37  
[178] 『告白』 8 巻 5 章 10 節 p.399  
[179] 『告白』 8 巻 9 章 21 節 pp.416-419  
[180] 『信の効用』 8-20 pp.44-45  
[181] 『ヨハネ福音書』 1 章 14 節  
[182] 『コロサイ人への手紙』 2 章 3 節  
[183] 『ヨハネの第一の手紙』 5 章 20 節  
[184] 『ヤコブの手紙』 1 章 5 節  
[185] 『真の宗教』 4-7 p.294 「……彼らはほんのわずかの言葉と内容を変えることによって、近年我々の時代のきわめて多くのプラトン派の哲学者たちがそうであるように、キリスト教徒になることであろう」  
[186] 『告白』 6 巻 5 章 7, 8 節 p.271  
[187] 『ヨハネによる福音書講解説教』 第 29 説教 6 節 p.88  
[188] 『告白』 1 巻 1 章 1 節 p.20 「あなたが駆り立てます、あなたを讀えることが喜びであるように、それは、あなたが私たちをあなたに向けて創られたからです、そのため私たちの心は、あなたのうちに憩うまでは安らぎを得ません」

## 文 献

- 『アウグスチヌス著作集』 宮谷宣史ほか訳、教文館、1979 年  
『アリストテレス全集』 出隆ほか訳、岩波書店、1986-1973 年  
アンドレ・ヴェルダン『懷疑主義の哲学』 岩坪紹夫訳 青山社、1982 年

- キケロ『神々の本性について』キケロー選集第 11 巻 山下太郎訳、岩波書店、2000 年  
柴田有『教父ユスティノス キリスト教哲学の源流』 勁草書房、2006 年  
小プリニウス『プリニウス書簡集』 国原吉之助訳、講談社学術文庫、1999 年  
スエトニウス『ローマ皇帝伝』 国原吉之助訳 岩波文庫、1986 年  
セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』 金山弥平、金山万里子訳、京都大学学術出版会、1998 年  
セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』 金山弥平、金山万里子訳、京都大学学術出版会、2004 年  
田中龍山『セクストス・エンペイリコスの懷疑主義思想』 東海大学出版会、2004 年  
ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』 加来彰俊訳、岩波書店、(1984)  
フラヴィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』 秦剛平訳 山本書店、1979 年  
『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』 世界の名著第 15 巻、田中美知太郎ほか訳 中央公論社、昭和 55 年  
『プロティノス全集』 田中美知太郎ほか訳 中央公論社、1986 年  
水地宗明、山口義久、堀江聡編『新プラトン主義を学ぶ人のために』 世界思想社、2014 年  
宮谷宣史『アウグスチヌス』 人類の知的遺産 15 講談社、昭和 56 年  
『ユスティノス』 キリスト教教父著作集第 1 巻 柴田有、三小田敏雄訳、教文館、1992 年



*Original paper*

## **How Philosophy Became Theology:**

The Limit of Human Cognitive Ability and the Appeal for a Merciful God

Tokuo HURUMAKI \*

<sup>1)</sup> Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

**Abstract:** Philosophy, which appeared in ancient Greece in search of what truly exists, reached the limits of human cognitive ability and fell into Skepticism. To overcome this serious problem, many philosophers converted over time to Christianity, which guaranteed the grace of God .

**Key words:** manuscript, camera-ready manuscript, bulletin of Nayoro City University, template file, Microsoft word





